ん。其處はベルトウの渡止場から餘り遠い所でない事だけは判つてゐるんですがねえ』

パトリスは一言も言はずに導かれる儘に彼に隨つて行つた。急にドン・ルイは大きな聲を出して、

『聞えましたか？』

『えゝ、ピストルの音が』

丁度その時、二人はレイヌアール街へ曲らうとしてゐた。邊りの軒が高いから、何處で發砲されたのか、確かな所は解らないが、エッサアレの家か、或はその直ぐ近くからである。

『ヤ・ボンが撃つたのか知ら？』

『ヤ・ボンは撃たないに定つてゐる。撃たないとするとヤ・ボンを狙つて誰かが撃つたんぢやないのか知ら。どうも心配だ……あゝ、若し可哀さうにヤ・ボンが殺されたのだつたら……』

『コラリイが撃たれたんぢやないか知ら！』とパトリスは私語した。

ドン・ルイは笑つた。

『ねえ大尉、私は此の事件に關係した事を今更情けなく思ひますよ！　私と一緒にならない以前にはもつとお悧口で……物のよく解る君だつたのでせうがね！　もうシメオンの手中に陷つてゐるコラリイを何のために彼奴が殺さうと言ふんです？』

彼等は急いで行つて、エッサアレの家の前を通つたが靜かだつた。それで横の小徑の方へ曲つて行つて、其處を下つた。

小屋の木戸の鍵はパトリスも持つてゐたが、内側から閂が挿し込んであつたので開けられない。

『おゝ！　おゝ！　これはぐづ〳〵して居れない證據だ、大尉、荷揚げ場で出會ひませう。私はベルトウの渡止場を見廻つ來てますから』とドン・ルイは言つた。

數分前から、明け方の青白い光りが夜の影に滲んで來た。然しまだ渡止場には人氣も無かつた。

ドン・ルイはベルトウの渡止場では何にも異常は見なかつた。パトリスの所へ戻ると、小屋の庭の敷石の所に繩梯子がおいてあるのを指した。ドン・ルイは荷揚場の小屋で見て置

いた繩梯子だと云ふ事を知つた。そして、彼獨特の直覺力を以て說明した。

『シメオンは庭の鍵を持つてゐるから、此の繩梯子はヤ・ボンが入つて行くのに使つたんでせう。して見るとシメオンがヴシュロオの家から歸つて來て、コラリイさんを連れて此處へ隱れようとしたのを、彼が見附けたのに違ひない。だから、問題は、シメオンがコラリイさんを上手く連れて來たか、又は連れ出さずに逃げて了つたか、今の所では何とも言へない。然し兎も角……』

彼は蹲んで敷石をよく檢べながら說明を續けて行つた。

『兎に角ヤ・ボンが金貨の袋の隱し所を知つたのは確かです、そして、其處にコラリイさんが居ると言ふんです、今でもゐるかも知れませんよ。最も惡く考へて、シメオンが自分の身の安全に氣をとられてコラリイさんを連れ出す間がなかつたらね』

『さうか知ら？』

『大尉、ヤ・ボンは二六時中ポケットの中へ白墨を持つて居るんです。私の名前を綴る以外には字はテンデ書けないのですが、此處に二本の直線を引いてゐます、此の二本の直線と、壁の根元を底邊にして見ると三角形になりますよ……金三角に』

ドン・ルイは立ち上つた。

『此の圖解は少々怪しいが、ヤ・ボンは私を魔法使ひかなんぞのやうに心得て、斯うして置けば、私が、きつと探し當てるに違ひないと思ひ込んだ譯ですね。此の二本の線で充分だとでも考へたんでせう。ヤ・ボンは可愛い男だ！』

『然し、是等の事件は、お說によると我々が巴里へ歸つて來ない前、十二時から一時までの間に出來た事なんですね』

『さうです』

『ぢや四五時間後に開く事になるあのピストルの音は、一體どうなるんです？』

『それは、僕にもまだ是れと云ふ考へは付いてゐません。こじ付ければ、何處か暗がりに蹲んで隱れてをつたシメオンが、追々夜が明けて來るし、ヤ・ボンの影も見えなかつたので、冒險する心算りで二三歩歩いてみたんですな。その時、見張つてゐたヤ・ボンが突然躍り掛つたんでせう』

『さう思ひますかね……』

『其處で激しい爭鬪が始まつて、ヤ・ボンが傷き、シメオンが……』

『シメオンは逃げたでせうか？』

『或は殺されたかも知れません。兎に角、暫く待てば總ての事が解つて來ますよ。』

繩梯子を壁の上の横木に結び付けると、パトリスはドン・ルイの助けを借りて壁を乘り越えた。それから、ドン・ルイが續いて越えると共に繩梯子を庭の側へ下ろして置いた。二人はその邊りをよく調べてから、遂に方向を轉じて灌木や丈の高い草を掻き分けながら小屋の方へ行つた。

夜はもう大方明け放れて物の形が明瞭り見えるやうになつて來た。彼等は離れ小屋の周圍を見廻つた。

街路の側の中庭を見渡す處へ來た時、先頭に立つて居たドン・ルイは振返つて云つた。

『僕が言つた通りになりましたよ』

二人は走つた。

入口の戸の前で、二人の敵同志が取つ組み合つたまゝ倒れてゐた。

ヤ・ボンは頭にヒドイ傷を受けて顏一面に血を浴びながら、右の手でシメオンの咽喉首をシッカリ摑んでゐる。

ヤ・ボンは死んで居た。だがシメオン・デイオドキスにはまだ息があるのを、ドン・ルイは一目で知つた。

シメオン、戰を挑む

ヤ・ボンの手を引き離すのには大分手間が要つた。セネガアレ兵は死んでも、仲々餌食を放さうとしなかつた。鐵のやうに固い、釘でも植ゑ付けられて居るやうな彼の指は、虎の爪みたいに對手の頸へ喰ひ込んで居た。對手は、全く意識を失つて、咽喉をゴホ〳〵云はせながら、打ち倒れて居た。

ドン・ルイは、シメオンのピストルが庭の敷石の上に落ちて居るのを見付けた。

『お前に取つては、實に幸福だつたんだぜ、ヤ・ボンを、擊ち殺さない前に頸でも摑まれて見ろ、締め殺されて了ふのは受け合だ。然し笑ふまいよ。ヤ・ボンは生命を助けて貰れた

だけさ』それから彼は悲しくなつて來て、『可哀さうにヤ・ボン！　お前はアフリカで、或る日、あの恐ろしい死の手から俺を救つて貰れたんだ……それに、どうだ、今日俺れの命令で命を殞したんだ。云はば、俺が手を下したも同じ事だ。ああ、可哀さうなことをした。ヤ・ボン！』

彼は死骸の前に跪いて、ヤ・ボンの兩眼を閉ぢてやつた。そして、その額に接吻しながら、此忠實な靈魂のために祈り、復讐を誓つた。

それからパトリスの手を借りて、此の黑人の死骸を、書齋の次ぎの寢室へ運んで行つた。

『大尉、大切りが濟んだら、今晩でも警察へ屆けませう。然し今は、彼の爲めに、又コラリイさんの爲めに、復讐しなけりやならんと云ふ、大切な事を控へて居ます』

彼は爭鬪の跡を詳細に調べ終つて、ヤ・ボンの所へ歸り、それから又シメオンの所へ行つて衣物や靴を綿密に調べた。

パトリスは此の恐ろしい敵と顏を合せたのだつた。曾て小屋の壁に隔てられながらも憎惡の眼で睨み付けた男！　シメオン！　シメオン・デイオドキス！　憎んでも飽き足らぬ大惡黨！　二日前、あの怖ろしい殺人を企み、苦惱に沈む二人を天窓から覗き込んで嘲笑した男だ！　シメオン・デイオドキス！　野獸にも劣る男だ！　コラリイを穴の中へ隱し、そして引出して、思ふ存分に苛まうとする男だつた！

彼は苦しさうだつた。息をするのでさへ、非常に難儀のやうに見えた。ヤ・ボンに締められて氣管を痛めたに違ひ無い。黃色の色眼鏡は、格鬪最中に何處かへ落して了つて居た。厚い、灰色の眉毛が眼瞼の上に重さうに覆ひ被さつて居る。

『大尉、その身體をよく探して御覽なさい』とドン・ルイが言つた。

パトリスが探すのを厭がつたので、ドン・ルイはシメオンの上衣を探り、紙入を取り出して彼に渡した。

中から彼の寫眞を張り付けて、希臘文字でシメオン・デイオドキスと言ふ名を記入した居留許可證が出た。寫眞は最近に撮影したものらしい、眼鏡を外し、頸卷きをした長髮姿である。そして千九百十四年十二月の消印があつた。商賣上の通信文、註文書、エッサアレ・ペエの書記としての名宛ある

手紙の内にはアメデ・ヴシュロオから來たのも交つて居る。文面は、

『シメオン様

私は上手に成功しました。私の若い友達がエッサアレ夫人とパトリスさんが病院で話して居るのをチラと撮影したんです。お二人とも並んでうつりました。で、もう直ぐに貴下の御滿足が行くやうに出來るだらうと思つて居ます。貴下の御子息に何時眞實の話をなさるんです！　若し御子息がお聞きになれば定めし御喜びの事だと思ひますが』

手紙の下の所にシメオンの手蹟で何か書いてある。

『も一度俺は確かに誓ふ、俺は戀人の爲めに復讐し終るまでは、パトリスとコラリイ・エッサアレが戀に落ちて結婚するまでは、決して伴に眞實を打ち明けないのだ』

『此れは君のお父さんが書いたんですね？』とドン・ルイは訊いた。

『さうでせう。友達のヴシュロオへ宛てた手紙と同じ手蹟です。ああ、何んといふ、いやな現實だ！　何んと云ふ見下げ果てた男だ！　實に言語同斷の大惡黨だ！』とパトリスは困惑しながら言つた。

シメオンは少し身體を動かして、眼を開いた。又閉ぢて了つた。意識が全く恢復した時、靜かにパトリスを見詰めた。

パトリスは窒息でもしさうな聲で直ぐ訊ねた。

『コラリイは何處に居るんだ？』

シメオンはまだ彼を見つめるばかり、何にも解らないやうな顏をして居る。憎らしさに彼はシメオンの顏を睨みながら荒つぽい調子で、

『コラリイは何處に居るんだ？　貴様はコラリイをどんな風にしたんだ？　もう死んで了ふかも知れない！』

シメオンの元氣は追々恢復した。

同時に意識も蘇返つて來た。彼は口の中で、

『パトリスよ……パトリス……』

邊りを見廻すと、其處にはドン・ルイが居る、そして格闘してヤ・ボンを殺した事も思ひ出したに違ひない。彼は又眼を閉ぢた。パトリスの怒りは益々激しくなつた。

『貴様は介抱でもして貰つて居る積かい？　俺はもう用捨はしないぞ！　若し返答しなけりや、殺して呉れるぞ！』

彼は血走つた眼を打ち開いて、咽喉を指しながら、到底も苦しくて口が利けない、と云ふ恰好をした。然し最後に口をモグ〳〵さして——

『パトリス！　パトリスはお前か？……俺は永い間斯う云ふ時を待ち焦れて居たんだよ……そして我々は今敵として會つて居るんだ！』

『さうだ不倶戴天の敵だ！　我々は死を隔てて互に對峙して居るんだ。ヤ・ボンは死んで了つた。そして又コラリイも多分……コラリイは何處に居る？　白狀しろ、さもなけりや……』とパトリスは少し誇張して言つた。

『ほんとうにお前はパトリスか？』と彼は小聲で繰り返し繰り返し言つた。

斯んな馴れ馴れしい物の言ひ方が、パトリスには癪に觸つて仕方がなかつた。彼は敵の上衣の折り返しを引掴んで、激しく搖つた。

シメオンは、相手の片手に紙人があるのを見たので、少しも抵抗がましい事はせず、パトリスの爲すが儘に任せた。そして微かに、

『今に俺をヒドイ目に合はせはしなくなるよ。お前はその中から手紙を四五通見付け出すだらう。そしたら、お前と俺との間隙が除かれて了ふのだ……おお、俺はどんなに幸福になるだらう、若し……』

パトリスは、強く引掴んで居た手を離して、恐しさうに、彼の顏を覗き込んだ。やがて低い聲で、

『そんな事はもう、言つて呉れるな。俺はそんな事は信じ度くないんだから！』

『パトリス、然しほんとうの事なんだよ』

『嘘だ！　嘘だ！』と大尉は叫んだ。彼にはもう自分を統御する力は無い、顏は極度の悲哀に歪んで、スツカリ面差しが變つて來た。

『ああ、もう知つて居ると思ふから、俺はもう、何にも云ふ必要はないが……』

『やい嘘つき！　そりや貴様のやうな惡黨のよく使ふ手だ！……若し貴様の云ふ事が眞實なら、何故コラリイと俺とを、

謀殺しようとしたんだ？　貴様は我々二人を、殺さうとしたぢやないか？』

『パトリス、俺は氣が狂つて居たんだ。さうだ、俺は時々氣が狂ふんだ。數々の悲劇で、俺の頭は調子が外れて了つた。俺の戀人コラリイの死……あゝ、それからエッサアレの家での生活……うん、それから、殊に金貨が……俺が二人を殺さうとしたつて、ほんとかい？　俺は少しも覺えが無い。そんな怖ろしいことを、夢に見たのは微かに覺えて居るやうな氣もするが。ぢやア、俺が昔された通りの事が、離れ小屋で起つたんだな。違ふか？　おお發狂？　何んと云ふ慘ましさだ！　俺は屋根裏の男のやうに、自分の意志と全く違つ事をしなけりやならなかつたんだ！……ぢや以前の通りの事が、小屋の中で起つたんだな？　同じ方法で？　而も同じ道具で？……さうだ、俺は夢を見たのだ、昔受けた苦痛を……そして、その時の最愛の者の苦痛を見たんだ……然し、俺が拷問されて居るんぢや無くつて、俺が拷問する男だつたのか……何んと云ふ慘ましさだ！』

彼は低い聲で、獨言のやうに言つた。時々躊躇しながら、又言ひ知れぬ、懼みを顏に浮べて物語つた。ドン・ルイはさう言ふシメオンの目的が何であるかを、彼の顏から見付け出さうとするやうに、凝とシメオンを見据ゑた。シメオンは言葉を續けて

『おおパトリス！　慘ましい男だ！……俺はお前をどれ程可愛がつたか……おお、それだのに今は俺の最も怖ろしい敵だとは……ああ、敵で無かつたら、どんなに？……どうしてお前を忘れられる？……さうだ、何故、エッサアレが死んだ時から、俺を監禁して呉れなかつたのだ？　其の頃から俺の頭が……』

『ぢや彼を殺したのはお前か？』とパトリスは訊ねた。

『いや、俺ぢやない……誰かが俺の復讐の的を窃んだのだ』

『誰だ？』

『誰だか知らない……總ての事が俺には解らないのだ……もうその事は言つて呉れるな……俺には堪へられない程苦痛なんだ……俺はコラリイが死んでからの俺の憂き目！』

『え、コラリイ！』とパトリスは思はず叫んだ。

『さうだ、俺が戀して居た女だ……小さいコラリイに就いても、俺は隨分氣骨が折れたんだぜ……エッサアレと結婚させたのが何よりも惡い。色々の不幸は其處から來たのだ……』

『では、彼女は今何處に居る？』とパトリスは苦しさうに言つた。

『それは言へない』

『ぢや、おお、さうだ、コラリイは死んだと云ふんだな！』と彼は怒りに震へながら言つた。

『いや、彼女は生きて居る。その事だけは云つてやる』

『ぢや何處に居るんだ？　それが一番大切な事なんだ。その外は皆過去の事だ！　然しそれはあの女の一命……コラリイの命に係る事だ……』

『まあ聞け』

シメオンは一寸言葉を切つて、ドン・ルイの方をチラと見た。

『あの男に暫く、遠慮するやうに言つて呉れ』と彼は言つた。

ドン・ルイは笑つた。

『勿論だ！　小さいコラリイさんは、金貨のある所に隱れて居るんだ。コラリイさんを救ふのは金貨を渡す事と同じだからね』

『宜しいか？』とパトリスはちよつと反抗的に言つた。

『大尉、宜しいよ。然しねえ、此の尊敬すべき紳士がもし此處を逃がして呉れたら、コラリイさんの在處を敎へると言つたつて、まさか、君も承知なんかはしないでせうねえ』と言葉に少しの笑談らしい所も見せずに、ドン・ルイは笑つた。

『それはもう』

『君は此の男を少しも信用して居ませんね。それとも信用して居ますかね？　して居なければ好いのです。此の紳士は氣狂ひだと言つて居ますが、我々をマントの邊でウロ付かせたお手並は、立派に精神の統一が取れて居る證據ですよ。だから、一寸でも彼の約束を信用すれば危險ですよ。其の結果……』

『え？』

『ねえ、大尉、君と此の紳士との取引は大抵まあ斯んなものですよ。「お前はコラリイを連れて行け、俺は金貨を取つて置

く」とね』

『それから？』

『それからとは？　君が此の尊敬すべき紳士と二人限りになると、きつとそんな考へになつて了ひますよ。取引は直ぐ濟みます。だから、僕は此處に止まつて居る事にします。……ええ斷じて！』

パトリスは立ち上つてドン・ルイの方へ二三歩近着いた。その聲はちよつと、彼に對して敵意を挾んで來た。

『私は、こんな反對を受けやうとは少しも思はなかつた。此れはあの女の生命に拘はる事なんですから』

『そりや勿論だ。然し、一方で又、それが三億法の金になる事なんだよ、君』

『ぢや私の言ふ事を拒絶なさるんですか？』

『拒絶したら？』

『女が斷末魔の苦しみをして居るのに、私のお願をきいて呉れないんですか？　寧ろ彼女が死んで欲しいんですか？　さア、此れが私の事件だと云ふのをお忘れのやうですね。それから又……それから……』

二人は寄り添つて居た。ドン・ルイは、今パトリスが言はうとして居る事の、それ以上の何でも知つて居るぞ、と云ふ態度を見せて居る、だからパトリスの腹立は一層夥しいのだつた。彼はドン・ルイに全く支配されては居たが、内心では少なからず、癪に觸つて居るのだつた。そして彼の過去を充分知つて居る以上、今更彼の都合の好いやうに使はれるのは、心中の不平を昂める一方である。

『ぢや、どうしても拒絶するんですか？』と彼は拳を固めながら言つた。

『さうですよ。ベルヴル大尉、馬鹿らしいから、こんな取引は拒絶したいんです……さうだ、それは馬鹿馬鹿しい事に違ない。三億法の金！　斯んな幸運を捨てる！　そんな馬鹿な事がどうして出來よう！　君と尊敬すべき紳士とを二人限りにする事には、異論なんか挾みはしませんよ。君はさうして欲しいのでせう。違ひますかね？』とドン・ルイは冷靜な態度で言つた。

『さうです』

『ぢや君、話して來給へ。紳士は令息を信用して、隱してあ

る場所を話して呉れませうよ。コラリイさんを渡して呉れませうよ』

『そしてあなたは？　どうするんです？』とパトリスは怒つて言つた。

『僕？　僕はねえ、友達が殆んど殺されやうとしたあの部屋へ入つて行つて、今の事と、過去の事とに就いて少し調べて見ようかと思つて居るんです。大尉、後から解りますがね、何にしても必ず保證だけは取つて置き給へ』

ドン・ルイは懐中電燈を點して小屋へ入つた、それから直ぐに書齋の方へ行つた。電燈の光が、壁に付いた窓の硝子に反射して行くのを、パトリスは見て居た。彼はシメオンの側へ行つて坐つた。

『さあ、早く話して呉れ』と彼は嚴めしく言つた。

『あの男に聞える事は無いかね？』

『大丈夫だ』

『パトリス、お前はあの男には充分注意しなけりやならんぞ。あの男は金貨を取つて、自分の物にしようと思つて居るんだ』

『餘計な事はどうでも好い。早くコラリイの話をして呉れ』とパトリスは辛抱し切れずに言つた。

『コラリイは生きて居ると、俺が言つて居るじゃないか』

『お前が出て來る時には、生きて居たんだ。然し其の後は……』

『さうだ、其の後は……』

『その後、どうしたんだ？　お前だつて疑つて居るぢやないか』

『昨晩の事だ、今から四五時間前だ。それで俺も少し……』

パトリスは、背中へ冷水を浴せられたやうに思つた。死んで了つた、などゝ云ふ言葉を聞いたら、どんな事を爲出かすか判らなかつた。で、思はず老人を締め殺さうとした時、老人は一寸相手を突き退けた。それでホット氣が付いた。

『餘計な手間を取らすな、何處に居るか言つて呉れ』と彼は繰返して言つた。

『いや、俺と一緒に行かう』

『お前にそんな元氣があるものか』

『そりや無いが、どんなにしてでも行かう……此處から餘り

遠くないんだから、たゞそれだけは俺の言ふ事を聞いて……』

老人は疲れ果てたやうに見えた。時々は息切れがした。まだヤ・ボンの手で咽喉を締め付けられてゞも居るやうに喘いだ。その上に深い悲しみに沈んで居るのである。

パトリスは、彼の顏の近くまで、身體を屈めて行つた。

『聞いて居るよ。だから、何卒か、早く話して呉れ！』

『よし、數分間の裡に、彼女を自由にしてやらう。然し、夫れには條件があるんだ、唯だ一つの……パトリスよ、お前はコラリイの命を賭けて俺に誓つて呉れ、お前は決して金貨に手を觸れないことを、それから誰にも知らさない事を誓つてくれ……』

『コラリイの首を賭けても誓ふ』

『よし、お前は誓つたな。然し……お前の友達だ……あの惡黨が屹度後を隨けて來るだらう、きつと見に來るだらう』

『いや、來はしないよ』

『さうだ、來ないだらう、お前が承諾しさへすればね……』

『何を承諾するんだ？　おお、早く言つて呉れ！』

『言つてやらう。まあ聞け。然し俺等は直ぐにコラリイを助けに行かなけりやならないのだ……而も出來る丈け早く……でないと……』

片方の足に身體の重みを支へて、殆んど跪いたやうな恰好をして居たパトリスは、その時、一寸口籠つた。

『ぢや、行かう、さあ！』それから彼は叮嚀な言葉に變へて、『どうか一緒に行つて下さい、コラリイが……』

『宜しい、然しあの男が……』

『それよりも、コラリイを先きに』

『何だつて？　あの男が俺達を見てるかも知れないよ！　金貨を奪つて行くかも知れないよ！』

『金貨など、どつちでも好い』

『パトリス。それ丈けは言つて呉れるな……金貨！　それが最も重大な事なんだ！　金が手に入つてから、俺の生活が變つたのだ！　過去なんかどうでも好い……憎惡も無けりや……愛もないのだ……唯、金貨ばかりだ、金貨の事ばかりだ……女は死んだつて好い……コラリイも死なしたつて構はん……そして世界全體が消えて行け！』

『ぢや、どうしたら好い？　貴方の要求はどう言ふんです？』

パトリスは此の男の兩腕を握つた。此の男こそ彼の父なのだ、その癖、曾つて誰に對して、これ以上の激しい憎しみを抱いた事があらうか。彼はその憎い男に一生懸命に歎願した。若し相手が涙を見て少しでも感動せられるやうな男だつたら、彼は大聲出して泣いただらう。

『どうしろつて言ふんです？』

『話してやらう、まあよく聞け。あの男は彼處に居るんだね？』

『えゝ』

『書齋にね？』

『さう』

『そしたら……決して外へ出しちやいけない……』

『と言ふと？』

『俺達の爲事が濟むまで彼奴を向うに居らせなけりやいけないのだ』

『然し……』

『何でも無い事だよ。よく聞けよ。お前が一寸向うまで行つて、彼奴を閉ぢ込んで了へば好いんだ、鍵は外れて居るが、門が二本ある。夫れで澤山。どうだい、俺の言ふ事を諾くかい？』

パトリスは反對した。

『氣が狂つて居るんだな！　私がそれに同意する？　え、私が？……あの人は私の生命を助けて呉れた人なんだ……あの人がコラリイを助けたんです！』

『なる程、彼奴は今コラリイの爲めに盡して居るよ。然し考へて見ろ。若し彼奴さへ居なかつたら、彼奴が干渉しなかつたら……コラリイは自由な身になるんだ……どうだ』

『知らない。』

『何故知らないんだ？　お前はあの男が何だか知つて居るかい？　強盜だぜ……何百萬と云ふ金を奪らうと云ふ考へしか、持つて居ない惡黨だぜ。氣を付けなけれアいかん。パトリス、餘り馬鹿らしい話ぢやないか？　さうぢやないか？　俺の言ふ事を肯くだらうね』

『きくものか』

『ぢや、コラリイが可哀さうになる許りだ……現在の狀態がお前には分らないのだな！　パトリス、今だよ、今でも遲い位だ』

『おお、そんな事を云はずに置いて下さい！』

『さうだ、さうだ、お前はもつと事情を知る必要があるんだ、お前も責任を負はなけりやならないんだ。あの獸のやうな黑奴が、俺の後を追掛けて來た時には、コラリイを一二時間の裡には放して、厄介拂する俺の心算りだつたのにね。それから……それからの事はお前も知つて居る……夜の十一時頃だつたよ……約八時間程前に……だから、お前も此處で肚を決める時だよ……』パトリスは興奮して、手が震へて居た。斯れ程までも苦しめられやうとは、曾つて夢にも思はなかつた。シメオンは、冷酷な調子で言葉を進めて行つた。

『あの女は呼吸が出來ない。誓つて出來ないぞ……吸へるだけの空氣が無くなつたら大變だ……そして身のまはりの土壤が崩れかゝりはしないかと心配で仕方がない。さうなつて了つたが最後、窒息さ……こんな所で、愚圖々々、議論なんかしてゐる間にね……考へて見ろ。あの男を僅か十分位締め込んで置くのが何んだ？……十分間じやないか、僅か十分だ。まだ考へ込んで居るのか。ぢや、彼女を今殺して居るのはお前だぜ。パトリス。思つて見ろ……生きながら埋められてるんだぜ！』

パトリスは立上つた。決心は既についた。どんなに、どんなに苦しい事であらうとも何を怖れようぞ。然も、シメオンの要求は小さい事だ！

『何をさせようとするんです？　命令して下さい』とパトリスは訊いた。

『俺がして欲しい事は、お前にも解つて居る筈だ。何、簡單な事だよ。戸の處へ行つて、閂を下ろしてから直ぐ歸つて來い』

大尉は小屋の中へ入つて、確りした步調で控の間を通り拔けた。

書齋の端の方で懷中電燈の光が上や下へ跳つて居るやうに見える。

無言の儘、一瞬間の躊躇もなく、戸をピシヤンと閉め、閂を下ろした。急いで元の場所へ歸ると、眸かつたと云ふやうな氣がした。此の行爲は誠に卑劣極る。だが避く可からざる義務を遂行したのだと彼は信じた。

『濟みましたよ。急いで行かう』と彼は言つた。

『起して呉れ。獨りでは、とても、起きられさうもない』

パトリスは相手の腋下へ手を入れて立たしてやつた。老人は足をブランとさせた切り、步けさうにもなかつた。それで身體も支へてやらなければならなかつた。

『おお、あの黑奴が俺をやつつけやがつたんだ』シメオンは叫んだ。『息が窒りさうで、とても步けない』

パトリスは運ぶやうにして步いた。シメオンは弱り切つて、しやくりながら言つた。

『此の方向……これから眞すぐに行くんだ……』

彼等は離小舍の端を曲つて、墓場の方へ向きを轉じた。

『お前は、戸をほんとに閉めて來たのか？』老人は言ひつゞけた。『うん。ピシヤンと云ふ音は聞えたよ…あ！　彼奴は怖ろしい奴なんだぞ……彼奴にはお前も餘程注意しなけりやならない……然しお前は言はないと誓つたな、さうだらう？もう一遍誓つて呉れ、お前のお母さんの思ひ出を賭けて……いや、コラリイに賭けて誓つて呉れた方が好い……若しお前が誓を破つたら其の場でコラリイを殺してやるぞ！』

彼は立ち止まつた。痙攣が起きて、肺へ少し空氣を吸ひ込まなければ、進んで行く事が出來ない。然し、話し續けた。

『俺は安心して好いのだつけ？　さうだとも。お前は金貨の事は何とも思つて居ないんだからな。それだのに、どうしてあんな男に、話さうとするんだ？　いや、氣に掛けるな。お前は言はないと誓つたんだから。おい、名譽に掛けて呉れ。それが一番好い。誓の言葉をきかして呉れ！　え？』

パトリスは、まだ彼の腰の周りを、支へて居た。大尉に取つては、怖ろしい事でもあり、苦痛の極みでもあつた。斯んなグヅ〳〵步いて居る者の腰を、厭々ながら抱いて居るのは、コラリイを生かして貰ふ爲めに忍んで居るのだ。斯んな男の身體に觸れると、身體から生氣が絞り取られて行くやうな氣がする。そして、心の奥に『俺は此の男の子だ、此の男の子だ……』と云ふあの慘ましい言葉が、又しても起つて來るのであつた。

『此處だよ』とシメオンは言つた。

『此處！　此處は墓場ぢやないですか』

『コラリイと俺の墓だ。此處だよ俺達が來ようと思つた所は』

彼は邊りを驚きながら振向いた。

『それからね・お前は歸りがけに足跡を消して置くんだよ、いいかい？　でないと彼奴は必つと足跡を辿つて來るから……』

『さ、早くしませう……そんならコラリイは此處に？　此の下に？　埋められて？　まあ、何て怖ろしい事だ！』

もはや假令一秒でもおろそかにはならないのである。タツタ瞬間でも、一足後れてもコラリイの命は取り返しの付かぬ事になりはしないか。さう思ふと、パトリスには一分經つのが、一時間も過ぎた事のやうな氣がする。だから、言はれる儘に、彼は何でも誓つた。コラリイの首を賭けて誓ひ、名譽にかけて誓つた。それにも拘らず相手は少しも爲事に取り掛りさうな氣配を見せない。

シメオンは小さいお堂の、下草の上へ寢轉んで指さしながら、

『其處だよ、その下だよ』と幾度も〳〵言つた。

『墓石の下にですか？』

『さうだ』

『では石を取り除けるんだな？』とパトリスは心配さらに、

『僕一人ではとても持ち上げられない……とても駄目だ。持ち上げるのに、三人は充分要りますよ』

『要らないよ。旋轉器で持ち上げるんだから。お前にも容易く出來るよ。端の方を引けば……』

『これ？』

『あ、その右の方だ』

彼は「パトリスと、コラリイの墓」と書いてある大きな石板を持つて引いて見た。

石は苦もなく持ち上つた。丁度下から突き上げられるやうにして。

『待て待て。石は支へて置かなけりや、又下へ落ちて了ふぞ』と老人は言つた。

『どうして支へるのです？』

『鐵の心張棒で支へる』

『どこにある？』

『二段目の踏段の下さ』

人が横になつて、充分寢られる程の窩が、丁度上から石段を三つ降りた所に造られて居る。パトリスは鐵の心張棒を見た。それで肩で石を支へながら、心張を取つた、今度はそれで支へた。

『よしよし。シツカリ支へて置けよ。それから今度は、窩の所で横になるんだ。其處に棺があるだらう。俺も時々其處へ行つて、コラリイの側で寢たものだ。何時間も同棲して暮したものだよ、彼女と話して……二人で話し合ふんだ……俺達は二六時中話し合つて居るんだ……おおパトリス……』

パトリスは斯んな狹い所で、背の高い身體を横にしたものだから、動きが取れなかつた。

『それからどうすれば好いんです？』と彼は訊ねた。

『コラリイの聲は聞えないか？　お前とコラリイとの間は、壁一重だ。地の中に煉瓦が二三個隱してある。コラリイが居る部屋へ行く戸も、その下にあるんだ……その又部屋の後が、金貨の袋のある場所だ』

老人は覗き込んで指圖した。

『戸は左手の方だ。それよりズツト先きの方だ……解らないか？……そりや不思議だ。そんなにノロ〳〵して居ては駄目だ。然し……もう解つたかい？　何、解らない？　俺が降りて行けりや文句は無いんだけど……何しろ一人しか入れない穴でね』

暫らくの間沈默は續いた。それから又——

『も少し先へ身體を延ばして見ろ。好いだらう。動けるか？』

『動けます』とパトリスは言つた。

『結構だ。いつまでもやつてごらん！』と老人は叫んだ。

身を急に引いて、彼は鐵の心張棒を外した。分銅が付いて居るので恐ろしく重い石が緩りと、然し非常な力で下りて來る。

土穴の中に埋もれながらパトリスは危難が近着いた事を知ると、すぐ起き上らうとして藻掻いた。シメオンは鐵の心張棒で、彼の頭上に一擊を加へた。アツと一聲叫んだ切り、パ

トリスはもう動かなくなつた。石は下りて彼を覆うて了つた。總ての出來事は、ほんの數分間に片付いて了つたのである。

『うま〳〵と貴樣の仲間から引離してやつた。彼奴は手に負へない奴だがね、貴樣だからこそ愉快な喜劇を打たせて呉れたのさ』

シメオンは、少しも猶豫しては居なかつた。パトリスは傷付いたらうし、その上、墓の下のあの姿勢では、到底墓石を持上げ得やうなどとは考へられない。だから、此の方面では、もう危險はなくなつた。

彼は小屋の方へ行つた。大分歩きにくさうにはして居たが、今迄は受けた傷を餘程誇張して居たのに違ひない。と云ふのは小屋の戸の所まで行くのに、今度は一度も休まなかつた。足跡を消すなんて考へは頭から馬鹿にして歩いて行つた。確乎たる計畫を抱いた人のやうに、そして今目前に果たすその計畫で、歴々たる勝算を有する人のやうに、彼はさつさと歩いて行つた。

樓、室の中へ入つて見ると、ドン・ルイが壁や、寢室と書齋の間の仕切板をコツ〳〵叩いて居るのを聞いた。

『おい、たうたう參つたね親分！　今度はお前の番だぜ！』

だが、色々と頓馬の多い人たちだ』

と嘲笑しながらシメオンは言つた。

急いで右手の臺所に行くと、メエトル器を開いて鍵を廻し、瓦斯を送り込むその手早さ。パトリスとコラリイに失敗した事を今や、ドン・ルイに向けて開始したのだつた。

然し、その間に、限りない疲勞が彼をおそつた。二三分間は彼も思はず自失しかけた。思ひ設けぬ所に怖ろしい敵があるのは、彼にも免れぬ事だつた。

だが、まだ爲事は片付いて居るのでなかつた。まだしなければならないのは、個人生活の安全を計る事だつた。彼は小屋の周圍を廻つて、黄色の眼鏡を探して、それを掛けながら、庭を通り抜け、開いた戸を閉めて出て行つた。それから小徑を下つて荷揚げ場の所まで來た。

ベルトウの渡止場の欄干の所で、も一度立ち止つて、さてこれからと、思案して居るやうに見えた。車挽が通る、青物屋が通る、人通りが多いので、仕方なく決心したらしく、自

動車を雇つて、ギマアル街へ行つた。

友達のヴシュロオは、門番所に立つて彼を迎へた。

『おお、シメオンさんですか？　ああどうなさいました？』

と門番は叫んだ。

『靜かに！　名前を言つて呉れるな！』と呟きながら門番小屋の中へ入つた。

『誰か俺の姿を見たか？』

『いゝえ、誰も。まだ七時半ですもの、家ぢや今起きたばかりですよ。然し檀那、惡黨が檀那にどんな事を致しました？餘程弱つてゐらつしやるやうで。』

『うん、黒坊が俺の後を追掛けて來たんだ……』

『然し他の人等はどうしました？』

『他の人つて誰だ？』

『二人で此處へ來た人です……パトリスは？』

『え？　あれが此處へ來たつて？』小さい聲で訊ねた。

『え！、昨晩、檀那がお出掛けになつて暫らくしてから、誰か友達をつれて』

『パトリスにあの事を話したかい？』

『檀那の息子つてことですか？……無論あたりまへの話で……』

『それでだな。だから俺がさう言つても、別に驚きもしなかつたんだな』と老人は言つた。

『今、あの人たちは何處に居ります？』

『コラリイと一緒に居るんだ。俺はコラリイを助ける事が出來たんだ。で、二人に渡してやつたよ。コラリイどころの騒ぎぢやないんだ。早く醫者に見て貰ひ度いのだ……猶豫して居る場合ぢやない』

『此の家にも一人居りますよ』

『駄目だ、そんな奴では駄目だよ。お前の所に電話帳があるだらう！』

『へい此處に御座います』

『ヂエラデックの番號を見て呉れ！』

『まあどうしてそんな？　あれは貴方いけませんよ、ヂエラデック博士なんて！　御存じないんですか？』

『何故いけないんだ？　彼奴の病院はモンモランシイ通りで近いよ。それに人目にも立たないからな』

『そりやさうです、然し何にもお聞きになりませんでしたか？　あの醫師に就いて、色々と評判が立つて居るんですよ。旅行券や許可證を僞造したとか、何だかそんな事に關係して居ると云ふ事ですよ』

『そんな事は、どうでも好いぢやないか』

『ぢやア、シメオンさん、いよ〳〵ずらかるんで？』

『何でも好いから早く』

ヴシユロオは電話帳を繰つて、それから交換局を呼んだ。「お話中」だつたので、そばにあつた新聞のはしへ、相手の番號を、記しておいた。暫くたつて、又電話を掛けて見る。先方が電話口で答へるのによると、先生は只今往診中で、午前十時でないと、お歸りでない、と言ふ事だつた。

『そんならそれでも好い。そんなに今は苦しくないんだから。ぢや十時頃お伺ひすると云つて置いて呉れ』

『シメオンと云ふ名にして置きませうか？』

『いや、俺の本名で通して呉れ、アルマン・ベルヴルと言つて置け。それから醫師に、外科の方だと云つて置いて呉れ』

門番は電話を切つた。さうして悲しさうに、

『まあ、シメオン樣。檀那のやうに誰にでも親切な方が……一體どんな事が起つてさうお成りになつたんです？』

『心配するな。俺の部屋はもう用意が出來たか？』

『ええ、出來て居ります』

『誰にも見られないやうにして、連れて行つて呉れ』

『いつだつて人に見られはしませんよ』

『早くしろ。ピストルをポケットへ入れて來て呉れ。此の門番小屋は留守にしといても好いのかい？』

『えゝ……五分間なら宜しいです』

小屋の背ろは中庭になつて居て、其處から長廊下が續いて居る。廊下の突當りに、又もう一つ小さい庭がある、そこに平家建ちの小家が立つて居る。

彼等は其家へ入つて行つた。

玄關から三室隣り合せに並んで居て、二番目の部屋にだけしか造作は無かつた。三番目の部屋は、ギマアル街に並行して居る町に向つて、戸が開いて居た。

二人は二番目の部屋で一寸立ち上つた。

『今入つて來た入口の戸はスツカリ締めて來たか？』

『はい、シメオン樣』

『俺達が入つて來るのを誰も見てなかつたね！』

『はい、誰も』

『此所にお前が居ることは、誰も氣が付きやしないだらうな！』

『勿論ですよ』

『ピストルを借してくれ』

『此處に御座います』

『此處で擊つても外に聽えやしないだらうね？　お前はどう思ふ？』

『聞える氣遣はありませんよ。誰に聞えるんです？　然し……』

『然しなんだ？』

『まさかお擊ちにはならないんでせう？』

『どうも仕方がないんでな』

『シメオン樣！　御自身へお擊ちになるんですか？　自殺なさらうとでも仰言るんですか？』

『笑談云ふない』

『では、誰をお擊ちになるんです？』

『俺が困る者をね、俺に仇をしさうな奴をね』

『では誰を？』

『お前をさ？』とシメオンはにやりとした。

引金は引かれた。不幸な男の腦髓は貫かれた。

ヴシユロオは石のやうに床の上に崩れた。

シメオンはピストルを投げ捨てて、ぼんやりと突立つた。一本づつ指折り數へて彼は六つまで勘定した。是は數時間の裡に片付けた六人の數を、數へたのに違ひない。グレゴアール、コラリイ、ヤ・ボン、パトリス、ドン・ルイ、年寄のヴシユロオ、六人！

屑には滿足な微笑が漂つた。もう一息だ、もう一息の努力で彼は逃走と完全とを贏ち得るのであつた。

暫くの間、もう何にも出來さうになかつた。頭が亂れて、頸がダラリと下つて來た。咽喉はゴロ〳〵と云つた、そして胸は、非常な重みで壓へ付けられるやうな氣がする。もうすつかり氣力がなくなつた。

然し十時に十五分ほど前になると、勇氣を鼓して立ち上つ

た。苦痛に打ち勝つて、彼は家のもう一つの戸口から出て行つた。

十時頃、自動車を二度も乘り換へて、彼はモンモランシイの病院に着いた。自動車を降りた時ヂェラデック博士も自身の車から出て來て、立派な本館の石段を上つて居た。此處で、大戰開始當時から、博士は私立病院を開いて居たのである。

ヂエラデック博士

ヂェラデック博士の病院には、特種の目的の爲めに使ふ附屬室が澤山あつた。みな美しい庭の内に散在して建つてゐるのである。本館は、大手術の時にだけ使はれる。

シメオン・デイオドキスが最初案内された所は本館にある應接室であつた。彼は助手と二三度應答した後で、別棟の部屋に連れて行かれた。

此處で博士と逢つた。六十位だが、動作はそれよりズツト若く見える。よく剃つた顏、それに片眼鏡を右の眼に嵌めて居る。だから片方の眼を顰める癖がある。大きな白い手術服を肩から引つ掛けて居た。

シメオンは、容態を話すのに、聲が出ないので非常に困ると云ふ風をして、昨晩、盜賊に襲はれて、物を盜られた揚句の果、咽喉を締められ、半死の狀態で道端に倒れたのだと言つた。

『貴郎はその時に醫師を迎へたら好かつたんです』と彼の顏をヂット見ながら、ヂェラデックは言つた。

シメオンは何も言はなかつた。それで醫師は續けて言つた。

『然し別に大したことはありませんよ。何しろ生きて居られるのですから、挫骨などと云ふやうな事はありません。喉頭に痙攣が來て居ますが、管を通せばすぐ樂になります』

助手達に、何か指圖すると、長いアルミニウム製の管をシメオンの氣管へ三十分間挿入させた。博士はかうして手術をして居る裡一寸座を外し、患者を診察した。此の手術が濟むと、患處は非常に呼吸が樂になつた。

『さ、もうそれで好いんです。私が思つたより早かつた。咽

喉を萎縮するやうな症狀があつたんですがね。お宅へ歸つて、安靜になさい。今度寢て起きた時には、呼吸は餘程樂になりますよ。』

シメオンは、手術料を聞いて拂ひを濟ました。博士が戸口の所まで見送りに來た時に、彼は立ち止まつて、他の事は一切云はずに、突然、

『私はアルブウイ夫人の友達ですよ』と言つた。

博士は何の事だか、解らないと、云ふやうな顏付をして居た。で、又、

『では、此の名ではお解りがないんですな。そんならお話ししますがね、それはモグラネム夫人の隱し名なんです。だから、私は先生と何でも御相談が出來るだらうと思つて居るんです』とシメオンは力强く言つた。

『一體、何の相談です?』と言つてまだ分らぬやうに、一層不思議さうな顏をした。

『さあ先生、そんなに用心なさる必要はありませんよ。二人きりですもの。二重戸で聲なんか、外へ洩れる氣遣ひはなし。まあお坐りなさい。それから御相談しても好いでせう』

『好いですが、ちよつと……』

『少しいら〳〵しますね』

『いら〳〵するのは待つてる患者の爲ですよ』

『ほんの暫くです。長いお話ではありません。ほんの一寸で……お坐りなさいませんか?』

博士は相手の眞向ひに、益々不審な面持で腰掛けた。

『私は希臘人です。實際、希臘は中立國ですから、まあ佛蘭西の友邦と言つても差支へないのです。で私は容易く旅行券を下附して貰つて、佛蘭西から歸つて行けますが、少し込み入つた事情の爲め私の名前でない、旅行券が欲しいんです。他人の名義で、それは先生と私と相談づくで何とでも出來ますが。それで、まあ先生のお助けを借りて危險を冒さずに佛蘭西を去り度いんです』

醫師は怒つて立ち上つた。

シメオンは、頓着せずに——

『先生、いやもう、そんなお芝居は止めにしませうよ……値段だけの問題でせう? 僕はもう決心して居るんですよ。然しどの位ほしいんです?』

醫師は戸の方を指した。

シメオンは柔順に彼の言ふ事を聞いた。それで、帽子を被つた。然し戸の所へ行つた時、

『二萬法！　これ丈けでどうです？』

『誰か喚んで、君を逐ひ出させようか？』と醫師は言つた。

シメオンは、靜かに笑ひながら、一寸間を置いて、

『ぢや三萬法！　四萬！　五萬法では？　はは……我々は遊戯をして居るやうなものだ、金の總額を知り度いものです……幾何でも出しますよ。但し、どうか定價だけにして置いて下さいよ。旅行券を作つて呉れるだけにしないで、佛蘭西を安全に出て行く保證もして下さい。丁度、モグラネム夫人がしたやうにね。それから、大抵その時の條件でねえ。どうぞ是非さうして下さい……額はどうです――十萬法ですか？』

ヂエラデックは、戸に閂を挿して歸つて來た。それから机の前に坐つて、極簡單に――

『それでは御相談に乘りませう』

『ぢや、クドク言ひますがね、十萬法で承知して下さるんですか？』シメオンは、椅子を彼のすぐ側まで引き寄せて言つた。

『まあ面倒臭い事が起らん限りは、それで引受けませう』と醫師は言つた。

『そりや一體どう言ふ事なんです？』

『いや、十萬法を土臺にして話しを進めようと云ふ丈けの事ですよ』

シメオンは、暫らくの間躊躇した。此の男は餘程貪慾な奴だと思つた。然し彼はも一度腰を下した。そこで、醫師はすぐに話を續けて行つた。

『どうか、本名を言つて下さい』

『それだけは訊ねないやうにして下さい。先き程言つた通り、之れには少し理由が……』

『それぢや、二十萬法にしませう』

『え？　そりやあんまりだと思ひます。そんな高い値段は聞いた事がない』

『高けりや、別に、是非どうと云ふのでもありませんからね。我々は今相談最中でせう。だからお止めになるだけの話ですよ』と冷やかに醫師は言つた。

『然しですね、先生は、どうせ人の名前で旅行券の僞造をしてやらうと言つたんですから、名前なんか聞いても、聞かなくつても、どちらでも好ささうなものですが』

『それが大切な事なんですよ。一口に言へば、立派な紳士が逃げるのを助けないで、間諜が逃げるのを助けると云ふ結果になりやしないかと怖れて居るんです』

『間諜みたいな者ぢやありません』

『どうしてそんな事が解るものか。考へて見給へ、君は僕の所へ如何はしい格好をして來たんだ。それで君の名前や身柄を隱して居るんだ。そして僕に十萬法からの金を出して脫走するのを助けて呉れなんて、逃げるのを急いで居る證據だ。それで居て、紳士として待遇される事を要求して居るんだ……さあ、どうだ、君……紳士は强盜や殺人犯のやうな眞似はしないよ』

老シメオンは、斯んな事では辟易しなかつた。手巾を取り出して額を悠々として拭いた。ヂエラデックは、彼に取つては恐るべき敵だ、斯んな男と知つたら來るんぢやなかつたと思つた。然し、契約は條件付きのものだ。解除して了ふにはまだ早い。

『はは……先生は隨分殘酷な事を言ひますね……』と彼は、わざとらしく笑ひながら言つた。

『そりや、決して大袈裟な事はない』と博士は言つた。『僕は、根據の無い事は言はないんだ。その人の地位から計算して正當な要求をするのだ』

『そりや御尤もです』

『ぢや捻を戻して君は同意したんだな？』

『ええ、然し最後に先生に言ひますが、モグラネム夫人の友達だと云ふ事を考へて下さつて、もつとお安くお願ひしたいんですが』

『そりや一體どんな事を仄めかさうとするんだ？』と醫師は訊ねた。

『モグラネム夫人は、先生から無報酬でして貰つたと言ひましたよ』

『それは事實だ、僕は報酬なんか一文も貰やしない。然し、僕に可成りの贈物をした事になるんだ。モグラネム夫人は魅

力のある美人だから、僕に好意を持つて呉れる事はそれだけで大した事だつたんだ』と醫師は意地悪さうに笑つた。

暫らく沈默が續いた。シメオンは此の男の前に居る事が、段々不愉快になつて來た。

『僕の言ふ事が悪かつたかね。君とモグラネム夫人とが特別な關係なのだつたら、失敬々々。どうせ過去の事だからね、悪く思はないやうに』

それから嘆息して、

『ほんとうにモグラネム夫人は氣の毒だ…』と博士は言つた。

『どうしてそんな事を仰言るんです？』とシメオンは訊いた。

『何……君は知らないのか？　あの過去の事を？』

『何も知らない』

『あの悲慘事を？』

『夫人が行つて了つてから、まだ手紙を貰つた事もありません』

『あゝ、僕に手紙が來たよ。昨晩、で、夫人が佛蘭西へ歸つて來た事を知つて、喫驚したんだ』

『佛蘭西へ……モグラネム夫人が……』

『さうだ。今朝、彼女から定めて來た場所で會つたんだ。それが又妙な所なんだ』

『何所です？』とシメオンはアリ〳〵と心配さうな顏付きをした。

『千法出すかね』

『出すからお話なさい』

『君の想像も付かない所だよ。ノンシャラントと云ふ運送船の上でだ。ベルトウの波止場に沿うてブウシイの荷揚げ場に繫いであつた船の上でだ』

『そんな事が、どうして有り得やう？』とシメオンは云つた。

『嘘ちやないのだよ。君は、手紙に何んと署名して居たか知つて居るかい？　グレゴアールと書いてあつたぜ』

『グレゴアールつて？　何だ、男の名前ぢやないか？』

と老人は、殆んど唸るやうに言つた。

『さうだ、男の名だ、見給へ、僕に宛てた手紙を貰つたんだ。彼女の語る所に依ると、今、非常に生命が危いと云ふ事で、

財産は分けて貰ふ權利のある男が、少しも信用が置けないと云ふ。それで僕に相談したい事があると云ふのだ』

『では……では……先生は行つたんですか？』

『行つたよ』

『いつ頃？』

『今朝、丁度君が此所へ電話を掛けた頃にな。然し不幸な事には……』

『ええ』

『少し遲かつた』

『と言ふと？』

『グレゴアール、そのモグラネム夫人は死んで居たんだ。絞め殺されてね』

『そして、もうそれ以上の事は知りませんか？』と到底物も言へさうにない程驚いてシメオンは訊ねた。

『それ以上の何んだい……』

『彼女の言つた男の事ですよ』

『夫人が疑つた男のことかい？』

『うむ』

『うん、知つて居るよ。手紙の中に男の名が書いてあつたから。その男は希臘人だ。そしてシメオン・デイオドキスと名乘つて居るんだ。彼女は、僕にその男の人相を書いて寄越した。それはまだよく讀んで居ないんだが』

彼は手紙を開いて二枚目を上から下までズツト見通して、小聲で讀んだ。

『老ぼれた老人……氣狂として通つて居る老人……二六時中頸卷をして黄色い眼鏡を掛けて居る老人……』

ヂエラデックが、讀むのを暫く止めて、シメオンの顏を見ると、非常な驚きの色を表はした。暫くの間、二人は物も言はずに睨み合つて居た。それから醫師は機械的に、

『君はシメオン・デイオドキスだな』

彼は反對しなかつた。總て是等の出來事は全く事實と思はれぬ程不思議でもあり、その癖少しも不自然な所がないので、嘘を云つても仕方がないと云ふ氣がしたからであつた。

『これは、大分事實が變つて來たぞ。もう笑談言つて居る場合ぢやない。之れは、僕に取つては重大な爲事だし、又非常に危險な爲事なんだ』

『それで、どうだと言ふのです？』
『手數料が違つて來るのさ』
『いくらに？』
『百萬』
『いや、とても……とても出せない……それから私はモグラネム夫人には、手を觸れて見た事もないんですよ。彼女を締め殺した男に、私も攻擊されたんだ。その男……その男はヤ・ボンと云ふ黑人なんです。僕を引捕へて、咽喉を締めたのも其男ですよ』
『ヤ・ボン……君はヤ・ボンと言つたね……』
『さうだよ、片手しかないセネガアレ兵なんだよ』
『君と二人で格闘したのかい……』
『さうだ』
『でその男を殺したのかね？』
『正當防衛でね』
『成程、でも、つまり殺したのだらう？』
『それは……』
醫師は肩を搖りながら笑つた——

『まあ聞き給へ、不思議に暗合して居るんだ。僕が運送船から出て行つた時に、六人の負傷兵に逢つたんだ。彼等は、此のヤ・ボンと云ふ男と、隊長のベルヴル大尉と、大尉の友達と、それから彼等の家の婦人を探して居るんだと言つた。
『その四人が行衛不明になつたんださうだ。拐した奴は、ある男……一寸待つた、その男の名前を、彼等は僕に言つたが、兎に角、その男を下手人にして居たんだ……おお、然し、之れは猶更妙だ……その男の名前はシメオン・デイオドキスだと言つて居た。だから、彼等の下手人は君だよ……妙ぢやないか……だから、此事は新しい事件を構成する。だから……』
暫く間を置いて、醫師は普通の調子で彼の求額を切り出した。
『僕は二百萬法貰ひ度いね』と。
もう、シメオンは、平然として居た。然し、猫に引捕へられた鼠のやうに、此の男に引摑まつて居るのぢやないか。醫師は彼を逃がして見たり、引捕へて見たりして戲れて居るのだ。そして、此の殘酷な遊戲から逃出す希望は少しも與へら

れなかつた。
と彼は靜かに口を開いた。
『それは强請りだ……』
醫師は頷いた。
『それに違ひない。確かに强請りだ。然し何にも僕がその機會を作つたんぢやない、話して居る裡に出來た强請だ。一寸した事から澤山の種が僕の手中に轉り落ちたんだ。君も知つて居るだらうが僕は、今迄警察と喧嘩して居たが、近頃になつて、仲直りしたんだ。職掌柄も、君が折角親切に持つて來て吳れた種を、莫迦にして放つて置けない程動搖したんだ』
『私が拒絕したらどうするんです……』
『なあに、拒絕したつて好いよ。警察の幹部連に電話を掛けるから。もう警察とは、仲直りが濟んで居るんだからねえ。今迄でも時々僕の爲めに使つた事もあるんだよ』
シメオンは窓や戸を見廻した。醫師はもう受話器を持つて居る。もう逃れる途はない。
都合の好い突發事件など待つては居られない。
『宜しい、承知しました。兎に角、それの方が好い。先生は私の事を知つて居るし、私も先生の事を知つて居る。仲直りする事にしませうよ』
『僕が言つた條件を基礎にしてか……』
『左樣』
『二百萬法』
『さうだ。先生の計畫を言ふが好い』
『いや、それや言ふ必要はない。僕には心積りがある。今此處で言ふべき事ではない。要するに君が逃げて、現在の危險を免れゝばそれで好いんだ。それは總て、僕が責任を持つよ』
『どんな保證の下に……』
『君は、今半金拂ふんだ。殘りは成功した曉に貰はう。第一の問題は旅行券だ、尤もこれは僕には第二だがね。然し、旅行券はすぐ出さう。何と云ふ名にすれば好いんだ……』
『どんな名前でも結構です』
醫師は一枚の紙を出して、文句を書き下した、それから、その文句とシメオンを見比べながら、
『灰色の髮……無髯……黃色の眼鏡……』

それから、一寸止めて、訊ねた。

『然し手數料の保證があるかい……之れは一番大切な事だよ……紙幣が好いな……現金か』

『上げますよ』

『どこに在るんだ……』

『一寸と解らない所に隱してある』

『何處か敎へて呉れないか……』

『敎へる事には別に差支へはありませんが、假令在所をお話しても、とても見付けられないだらと思ふから』

『よし、それなら?』

『グレゴアィルは四百萬法の金を隱して居たのだ。それが運送船の中に在るんです。一緒に行きませうよ。其處で、最初の百萬法をお渡ししよう』

博士は勢立つて、

『君は、今運送船の中にあると言つたね……』

『さうです』

『で、其處に四百萬法あるんだね……』

『さうです』

『ベルトウの荷揚場の、あのモグラネム夫人絞殺の現場だね』

『左樣。あそこに四百萬法隱してある』

『僕はその金では支拂を受けないよ』

『何故受けないのです……氣が狂つて居るんだな』

『何故受けないつて……當り前じゃないか、已に人の手に移つて居る金をどうして支拂ふんだ……』

『なに、何だつて?』とシメオンは失望して叫んだ。

『此の四百萬法の金は僕の物だぜ、だから君はそれで僕に支拂ふ事は出來ないよ』

シメオンは肩を搖つて、

『莫迦な事を。先生の物になるには、先づ君の手に納める必要がある』

『それに違ひない』

『さうでせう……』

『さうだ……』

『ぢやア、もう手に納めたのかね』

『納めたとも』

『なに! 說明して見ろ。すぐ說明しろ』シメオンは、怒りと怖れとの爲めに我身を忘れて叫んだ。

『云ふよ、誰にも解らないと云ふ、隱匿所は四册の古い人名簿だよ。巴里の部と地方の部と二册づゝ四册とも本の中味は空つぽで上皮ばかりなんだ。そして、その中に金が隱してあつたんだ一册の本の中に百萬法づつ入れてあつたのさ』

『謊だ……謊だ……』

『船室の隣りの、物置き部屋の棚にあつたんだよ』

『ええ、それから……』

『それからか……それから此處へ持つて來たんだ』

『此處へ……』

『君の眼の前にある本棚の中へ持つて來て居るんだよ。だから今となつては僕が法律上正當な所有者だよ。だから、その金で君から支拂つて貰ふ事は出來ないね……』

『あ、貴樣は泥棒だ……貴樣は泥棒だな……貴樣は怪しからん泥棒だ、よし、俺は貴樣に復讐してやるんだ。

『泥棒め……』怒に任せて、シメオンは拳を固めながら言つた。

ヂエラデツクは沖靑き拂つて、まあ靜まれと云ふやうに手で制止した。

『之れはヒドイ事を言ふ、そりや間違ひだ……全く間違つて居るよ。モグラネム夫人が、僕に愛情を持つて居て呉れた事を、考へて見て呉れ。或る日の事だ、或る朝の事だつたよ。非常に興奮した後で「私の親愛なる友達よ……」と僕に言つた、モグラネム夫人は僕の事を親愛なる友達といつも言つて居たんだ。それから「親愛なる友達よ……私が死んだら…………」その時から已に不吉な死樣を彼女は豫想して居たんだね……「私が死んだ時には、貴郎に私の家にある物を殘らず差し上げます……」と言つたぜ。臨終の、彼女の家は運送船だつたんだ。彼女の斯う云ふ神聖な希望を裏切つたり、彼女の思ひ出に暗い影を殘したり出來ると君は思ふのかい……』

老シメオンはそんな言葉を聞いて居なかつた。惡魔のやうな考へが彼れの心中に起つて來た。で、醫師の方へ恐ろしく氣を付けた樣子で振向いた。

『大切な時間を下らない事に使つて了つたねえ。どうだ君、決心が付いたかねえ……』と博士は言つた。

彼はシメオンが依頼による條件を記入した旅行券を弄つて居た。シメオンは默つて彼の側へ來て、たうとう小聲で言つた。

『その紙を一寸だけ見せて貰ひたい……一度で好いから……』

醫師の手から紙を取つて一讀すると、餘りの事に後へ退いた。

『何と言ふ名を書いたんだ……え……何て言ふ名だ！……私に斯んな名前を付ける權利が、何所にあるんだ！　何故斯んな名前を書いた……』

『君ほどんな名でも好いから書いて置いて臭れと言つたぢやないか……』

『然し何んで斯んな名前にした……何故此の名前？』

『本名だから好いぢやないか……』

老人はもう餘程恐ろしくなつたと見えて、博士の方に詰め寄り、震へ聲になつて云つた。

『唯一人の男だけが、あの唯一人の男だけが推察する力を持つて居るんだ……』

それから永らく間を置いて、博士はクツ〳〵笑ひながら、

『僕も知つて居るよ、唯一人の男だけが推察する力を持つて居るんだ。だからその男を僕にして置いたらどうだ』

『唯一人の男……その男だけが、君のやうに、四百萬法の金もたちどころに見付け出す事が出來るんだ』と老人は云つたが、再び呼吸が困難になつたらしかつた。

醫師は何にもそれに答へなかつた。そして次第に顏を和らげて來た。

餘程脅えて、言ひ掛けたその人の名も言ひ得なかつた。主人の前の奴隷のやうに眼を伏せた。話の初めから既に怖ろしい者の壓迫を感じて居つたのである。顏前の男、それは一言一行を以て回天の事業をなす巨人だ。その身體さへ人並はづれて巨大である。

『アルセエヌ・リュパン！……アルセエヌ・リュパン！……』と怖しさの餘りたうとうシメオンは呟いた。

『上手く言ひ當てたね。』と醫師は立ち上りながら言つた。

彼は眼鏡を外し、ポケットから取出したクリイムで顏を拭つた。そしてほんたうの朗かな顏の生地を表はして揶揄する

やうな顏付きをしながら、悠々と笑つた。

『アルセエヌ・リュパン……アルセエヌ・リュパン……俺は彼奴の手に入つてるんだな……』

『どぢを踏んだね、馬鹿爺さん。馬鹿爺に違ひないさ！　おい！　俺の名聲も知り、俺をあんなに怖れても居た癖に、どうして又、俺が瓦斯小屋の中に封じ込まれる程の馬鹿だと信じたんだい？』

リュパンは室内をあちらこちら歩みながら話をつゞけた。それが長白を今云ふ最なか、その白の名句に句切りを付け、演出の効果を自らたのしみ、或る感慨さを以て自らの白に聽き惚れるところの、喜劇の名優のやうに見えた。此世の何物に替へても、此の立場を讓らず、此役を放棄すまじき氣勢が、そこに感じられる。

『いゝか、今此瞬間に、俺は貴樣の首つ玉を締め上げて、俺たちの此第五幕目に鬼を付ける事も出來るんだぞ。だが、俺は此五幕目が短か過ぎるのが嫌なんだ。俺は舞臺渡世の男だ！　その上に、こんな工合で、興味は何と跳ね返るんだ！　獨逸めの頭が考へた思ひ付きを見てやるのも一興だ！　俺は書齋に入つて、懷中電燈を紐の先に結び付けて吊しておいたんだ。そして、パトリス君にも、俺がさも書齋の中に居るかのやうに信じさせてやつたんだ。だからパトリス君は、貴樣から俺を封じ込めと云はれても、三度まで拒絶したのだ。で、結局、あの懷中電燈を俺だと思つて封じ込めたのだ。それを見て居る俺の可笑しさつたら、なかつたね！

『千兩役者の藝だね、え？　違ふかい？　貴樣も感心して呆然自失の態だね……それから十分間貴樣が戻つて來たね、どうだ！　舞臺裏では如何こ素破しい情景が展開されて居たか！　無論、俺は書齋と寢室の隔ての、戸や壁を撲りまはしたさ……とは云ふものゝだ、俺が居たのは書齋ぢやなかつたのだよ。寢室の中こ居たんだ。シメオン爺さん、それとも知らず、相手の命を片附けたと安心した譯だね、そして澄ましアして出て行き居つた。何と凄い腕だらう？　斯う見屆けた上は、敢て貴樣のあとを蹤ける必要もなかつた。二と二は四となる、だから貴樣の行先きは門番のアメデ・ヴシュロオの處に違ひないと思つたのだ。全くその通り、貴樣はそこに行つたのだつけね』

ちよつと休んで、リュパンは語をついだ。

『あゝ！　シメオンの爺さん。其所で貴樣のやつた事はずゐ分、無分別な仕業だつたね。だが、其のおかげで俺の仕事は樂になつた譯さ……俺が行つた時には、誰も門番小屋には居なかつた。をかしい、どうして貴樣の行衛を探してやらうか、と思案して居る矢先き、天の助けか、俺は見付けた。ほら、新聞の端に、何か書いておいたらう？　鉛筆で書いて間のない電話番號だ。そらそら！　足跡があるぞ、と、俺は即座にその番號を呼出したね。そして《私はさつき電話をお掛けした者ですが、電話番號だけで、お所を存じませんので、お教へ願ひたいので》と、しづかにやつたものだ。すると相手の答へは、《モンモラシイ大通りのヂェラデック病院です》と來た。忽ち分つたね、ヂェラデック博士に　さうだ、シメオンの奴先づ喉の挿管、それから、旅行許可證だなと感付いたんだ。あの醫者は、何しろ許可證僞造の名人なんだから』

『おゝ！　おゝ！　シメオン爺逃走の卷かな？　だから可哀さうなヴシュロオ君のことなど構つては居られない。俺は此病院に走せ付けてヂェラデック博士に會つたんだ。好い男だつたね。そいつア、面白いやと云ふ事になつて博士は俺を身替りにして呉れて、病院を一日あけて呉れたのさ。簡單に云へば、貴樣の來るのは十時だつたから、その前にはまだ二時間も暇があつた。それで俺は船へ行つて、金をせしめ、すつかり用意を調へて待つて居たと云ふ次第なんだ』

リュパンは老人の前に立寒かつて、

『さア、用意は出來たか』と叫んだ。疾くから魂を奪はれたやうになつて居たシメオンは、それを聞くと共に飛び上つた。

『何を用意するんだつて……そりや解つて居るではないか……大旅行だよ旅行券は出來て居るぜ。切符も買つてあるぜ。巴里から地獄までの急行列車。死骸寢臺車だ。さあ、その内へ入つて行け……』とドン・ルイは彼が訊ねもしない事に答へるやうにして言つた。

老人は足をワナ〳〵震はせて居た、さして一生懸命になつてヤットの事で言つた。

『それではパトリスは……』

『パトリスがどうしたんだ……』

『俺を助けて呉れれば、俺もパトリスの命は助けるよ』

『何だつて、どの面さげてそんな事を言ふんだい。パトリスは俺の友達だぜ、お前さんは、俺がパトリスを見捨て置いたとでも思つて居るのかい！　もしパトリスが、危機に迫つて居るのなら、お前なんかの臨終にこんな面白いお悔みが言へるかい？　そんなリュパンだと思ふのかい！　ねえシメオン。お前の幕はもう終りになつて居るんだ。今度はお前の番だよ、天國で御緩りとお休みになるのは。』

彼は窓の覆を外して、戸を開いてパトリスを喚んだ。

『ああ、大尉、氣分はどうです。もうスッカリ氣が付きましたね！　私を見ても喫驚しないらしいね……いや、お禮なんかどうでも好いですよ。だが此處へ入つて入らつしやい。シメオンが君の事を訊ねて居ますから』

それから、老人の方を振り向いて言つた。

『お前の息子だよ……お前はほんとうに慘酷な父親だなあ……』

最後の餌食

パトリスは頭に繃帶して入つて來た。是は、シメオンこ撲り付けられたのと、重い墓石で壓へられたのとで古傷が又惡くなつた爲めである。蒼い顏をしてひどく苦しさうこ見えた。

シメオン・ディオドキスの顏を見ると怒が一時に込み上げて來た。然しヤットの事で夫れを抑へ付けた。二人は微動もせずに面と面と向ひ合はせたのだつた。ドン・ルイは揉み手をしながらひとりごとを言つた。

『何と云ふ場面だ！　何と云ふ壯嚴な場面だらう！　好い舞臺ではないか？　親と子！　殺人犯とその被害者！　まあ何と言ふ、交響樂だ……低い顫動音……二人はどうなつて行く？　子が親を殺すのか、親が子を殺すのか……ああ悚つとするやうな瞬間……おお！　偉大な靜寂よ……血の叫びが波打つて居る！……今だ！　流血の叫びは、今に起るのだ。互に腕と腕で根限りの格闘をする。對手を締め殺すまで』

パトリスは彼に二三歩近付いた。已に彼の手は廣げられた。將に起らんとする格闘の用意をして居るのだつた。これこそ今ドン・ルイが暗示した幕なのだ。身體の痛みで意氣銷沈した上に、強者の意志に支配されて了つて居るシメオンは、もうすつかり敵に身を任せて歎願した。

『おお、パトリスよ……パトリス、お前は俺をどうしようと言ふのだ……』

彼は手を差し出し、身體を敵の手に委せて哀れみを乞ふのであつた。パトリスは此の態度を見て迷つた、不思議な因縁で繋がつて居る此の男の顏をヂット見詰めるのであつた。

『コラリイ、コラリイが……コラリイが何處に居るか敎へれば命だけは助けてやらう』

老人は驚いた。極惡非道な性質がコラリイの事を思ひ出すと急に蘇返つて來た。そして又惡計を企む勢力が同時に回復したのだつた。彼は殘酷な笑ひを洩らした。

『駄目だ、駄目だ……コラリイも俺も同じ境遇だ……俺は殺されても好い。コラリイを隱して居る所は金のある所だ。決して、言はないぞ……俺は夫を言ふ程ならどんなにして殺されても好いんだ。』

『では大尉、其奴を殺し給へ。殺したまへ、其奴は死に度いと言つて居るんだから』とドン・ルイは言葉を挿んだ。

今一度、すぐにも叩き殺して復讐しようと、大尉の顏は紅くなつた、が直ぐ又その憤激を鎭める力が働いた。彼は躊躇した。

『いや、そんな事は到底出來ません』と彼は低い聲で言つた。

『何故出來ない！……容易い事ですよ。鏃子を絞めるやうに、其奴を絞めて、片付けて了ひ給へ……』

『どうしても出來ません』

『何故出來ない……絞め殺すのが厭になつたんですか？ その位の事が出來なくなつたんですか……若し相手が獨り兵で、戰場だと考へたら……』

『さうです……然し此の男は……』

『その手が、駄目になつたんだね？ 引捕へて締めると云ふ考へが煙になつたんですか？……さあ大尉、此處に僕のピストルがあるから是で其奴の腦髓をブチ貫いてやり給へ』

パトリスはピストルを受け取つて、シメオンを睨つた。怖ろしい沈黙が續いた。老シメオンは眼を閉ぢたが、冷汗は頰の上に瀧のやうに流れて來た。

遂に大尉はその手を下げた。

『どうしても私には出來ません』と彼は言つた。

『そんな馬鹿な事があるものか。さあ、やり給へ』とドン・ルイが言つた。

『いいや……どうしても……』

『併し、何で出來ないんです』

『とても出來ないんです』

『出來ないんですつて……ああ、僕はその理由を言つて見ようか……君は其奴を君のお父さんだと思つて居るんでせう』

『ええ、恐らくその理由なんでせう……時々、ふとそんな氣がして、氣が臆するので』と大尉は低い聲で言つた。

『何と言ふ事です、獸だか惡漢だか譯の解らん奴だと考へれば何んでも無いぢやありませんか』

『然し私に殺す權利はありませんよ。どうしても殺してやらなけりやならない奴ですが、私の手に掛けてはどうも。私には權利が無いんですから』

『ぢやア、復讐はどうする？』

『そんな可笑しな事はありません。そりや無茶です』

ドン・ルイは彼の側へ行つて、彼の肩を叩きながら重々しく言つた。

『若し此奴が君のお父さんだつたら、私が君に殺すやうに奬めるやうな男だらうかね？ よもや私をそんな男だとは思やしないでせう』

パトリスはハツと見詰めた。

『それに就いて何か御存知の事があるんですか……何か確かな事を知つて居るんですか……おおどうぞ……』

ドン・ルイは續けて言つた。

『若し此奴が君のお父さんだつたら、君が憎むと云ふ丈の事でも、僕は決して賛成しないと信じて吳れるでせう……』

『おお……其奴が私の父でないんですつて？』とパトリスは叫んだ。

『勿論、そんな事は斷じてありません……』と彼は固い確心を以て熱心に告げたのであつた。

『決して、君のお父さんぢやありません……此男の面を見給へ！　此惡黨らしい頭の恰好を見給へ、總ての暴行は此の獰猛な面にアリ〳〵と顯れて居る。此の冒險が始まつた最初の日から、最後の日まで、罪惡と云ふ罪惡は、皆此奴の手で爲遂げられたんです。まあ聞き給へ。我々は始め惡黨が二人あると思つて居た。エッサアレが惡業を始めて、此の老シメオンが完成したと許り思つてゐた。然し其れは事實ではない。惡黨は、唯一人だつた。その惡黨こそ此處に居るシメオンなんです。パトリスさん分りましたか……コラリイさんやヤ・ボン、それに門番のヴシュロオや、一味の女を殺す前に、も一人殺して居るんです……その男を、彼は特別な方法で殺したんです。君はその人の肉であり血であるんです。そして、君をパトリスと呼び、君の爲にのみ生きて居た人です。その人の斷末魔の叫びを電話の所で君は聞いたでせう。その人を殺したのは此男です。殺されたその人が君のお父さんの、アルマン・ベルヴルと云ふ方なんです。解りましたか？』

パトリスはまだ何の事だか解らなかつた。ドン・ルイの言つた事で、彼の頭に漲つて居る暗雲を拂ふ事は出來なかつた。もう、彼には此の考へが頭にこびり付いて居たのだつた。それで彼は吃りながら、

『その人が私の父ですつて……そしてあの時私の聽いた聲が父ですつて？』

『さうです、パトリスさん、それが君のお父さんです』

『誰が殺したんです？……』

『此奴ですよ』とドン・ルイはシメオンを指して云つた。

老人はヂッとして、獰猛な眼を開いたまゝ、恰も重罪人が判決を待つて居るやうであつた。怒りに燃えて居るパトリスは、彼をキット見据ゑた。

『ぢや貴樣は、何と云ふ名だ？　何んと云ふ男だ？』そして、今度はドン・ルイの方を向いて、

『此人の名を教へて下さい、何卒……僕は此奴を、殺して了ふ前に此奴の名前を知り度いんです。』

『此奴の名前？　まだ想像が付きませんか？　さう、僕は最初の日から此奴に就て探索して居たんです。兎に角、是認し得べき唯一の假定によつて』

『然しどんな假定を？』とパトリスは焦れつたさうに言つた。

『ほんとうにきゝ度いでせうね？』

『おお、どうぞ……私は此奴を殺してやり度くつて堪らないんです、然し其前に名前を是非とも知つて置き度いのです』

『よろしい……』

二人の間に沈黙がつゞいた。互に顏を見合せながら、彼らは其所に立盡して居る。

だが、ドン・ルイは疑ひもなく、相手に眞相を打明ける時機にはまだ早すぎると感じたに違ひない。彼は云つた。

『君はまだ、眞相を聞くだけの用意が十分でない。眞相をきかす瞬間は、君がその間に何の疑念をもさしはさまない瞬間でありたい。併し、今云つてるのが冗談でない事だけは信じたまへ。人生は戲曲のやうな物で、十分の用意が備つてのち、劇的効果は始めて生れるのだ。但し、私は何もそんな劇的効果ばかり尊重して居る譯ではない、たゞ、君に、此奴の事で、確乎たる信念を持たせたいと希望するからです。此奴は、さつき君にも云つた通り、君のお父さんでもなければ、また、こんなにシメオン・デイオドキスの風貌を眞似、生活を模倣して居るに拘らず、決してシメオン・デイオドキスでもありません。

『やつと分りかけたやうですね？　今云つた通りを、もう一度繰返して云へば斯うだ（私たちは此事件に於て、決して二人の犯罪人を持つて居るのではない。犯行を始めたのはエッサアレだ、が、そのあとを繼承したのがシメオンなる者だと云ふのでは決してない）犯行の初めから、今もまだ生存して働き、邪魔者を殺してその人に化け、呪はしい惡行をつゞけて居る者は、實に常に同じ一人だつたのです。……分りましたか？　大規模な事件の中核として、奸計をめぐらした者、有利な目的の遂行のためには、あらゆる邪魔者や共謀者の激しい反抗を蹂躙して進んだ者、その者の名前を今更ら云ふ必要があるでせうか？　パトリス君、君の今までの物の見方より、もう少し高い所に視點を置きたまへ』

『君の記憶にばかり探索の根據を置かないで下さい。ほかの記憶をお考へなさい、コラリイさんが話した過去の記憶に探索の眼をお向けなさい。あの悲慘な劇中の人物として闘つたあらゆる人、パトリス君、そのあらゆる人、つまり君のお父

さん、コラリイさんのお母さん、フアツキ大佐、グレゴアール、ヤ・ボン、ヴシュロオのすべての人に殘虐を加へた唯一の犯人、唯一の兇漢、唯一の殺人鬼、唯一の鬼才が誰であるか？　さうだとも、さうだとも、君にだつてもう想像はついたでせう。たとひまだ眞相はハツキリしなくても、見えざる幻想が、君の體内をめぐつて居る。犯人の名は、もはや君の腦中に泛んで居る。彼の憎惡すべき魂が暗黑界から拔け出て、ほんとの姿が赤裸にされ、假面が引剝がれた。そして君は君の眼前に犯人其人を見て居る。此奴こそ……『

此奴こそ、とその恐しい名を發言する者は誰であらう？

それは確乎たる信念を以てドン・ルイが云ふのであらうか？

今忽然と湧いて來た理解からの驚異と躊躇を以てパトリスが云ふのであらうか？　底深い沈默の中に四綴りの名が反響した瞬間から、パトリスは疑ふ暇も持たなかつた。どんな奇蹟で、このやうな啓示が眞相の單純な說明として發現したのか、考へて見るまでもなかつた。彼は此眞相がもはや動かす可らざる證據で說明された事をその刹那に承認したのである。そして又、曾つて想像したこともない程の人物、今此所で、最も不可解な謎に、最も論理的で、最も素破らしい釋明を與へた人物の名が、頭の中で渦卷くやうに繰返へされた。

『エッサアレ・ベイ……エッサアレ・ベイ……』

『エッサアレ・ベイ』とドン・ルイは繰返して云つた。『エッサアレ・ベイ、此人物が君のお父さんを殺害した、云ひ得べくんば君のお父さんを二度まで殺害したのだ。一度はあの小屋で、殺した上にその幸福を奪ひ、生存の意義を失はしめた。そして第二度目は數日前だ、君のお父さんアルマン・ベルヴルが書齋で、君に電話を掛けて居る所を躍り掛つて殺害した。そして又エッサアレ・ベイこそ、コラリイさんのお母さんを殺し、コラリイさんを人知らぬ墓穴に埋めた男なんです』

此時こそ、殺意は決心された。士官の眼には制し切れぬ決意が溢れた。父を殺し、コラリイを殺した者は、たちどころに殺されなければならない。此義務は明瞭にして正當である。兇惡極るエッサアレは、親たちの息子であり婿である者の手で殺されなければならなかつた。

『題目でも唱へろ、十秒すぎたら佛樣にしてやるぞ』と彼は

冷やかに云つた。

彼は秒を數へた。丁度十秒數へて、今擊たうとした時、エツサアレの奥底に秘む野獸のやうな勢力が頭を持ち上げた。まだ老シメオンを裝ふ顏はして居たが、何處かに力强さが殘つて居る彼は非常な勢で叫んだ。パトリスは、一寸躊躇した。

『さあ殺せ……さあ息の根を止めろ！……俺は負けた。敗北した。然し矢張り俺の方が勝利だ！　コラリイを殺した上に、俺の金貨は救はれたんだ……俺は殺される、然し、俺の愛して居た女、俺の命にも換へ難い女も金貨も誰の手にも入らないんだ。パトリス、おい、お前と俺とが氣違になる迄惚れて居た女はもう生きて居ないんだぞ……今頃は、救はれる見込も立たずにあの女は死にかかつて居るのだ。俺が女を引出さない限り。貴樣の手に女は渡らないんだ。なあ、パトリス、俺の復讐は濟んだ。コラリイは死ぬんだぞ！』

强暴な精力が蘇返つて、彼は叫んだ。パトリスは、片手でピストルを向けながら何時でも擊てる姿勢で、彼を引掴まへて居た。さうして此らの心を苛まずには置かぬほど激烈な相手の言葉を聞いた。

『パトリス、彼女は死んだ……死んだんだよ。もう何の手段も無いよ。お前には彼女の死骸の在所も解るまい、彼女と俺の金貨を地球のドン底に埋めたんだ。墓石の下かと云ふのか？……へへ笑はせるなパトリス、お前がどんなにしたつて彼女の居所は解りやしないよ。金貨が彼女の息を塞ぐのだ。コラリイは死んだ……コラリイは死んだ……お前の面へ斯んな詞を投げ付けてやるのが、俺には愉快で堪まらない。苦しんで居るやうだな……コラリイは死んだ……コラリイは死んだ……』

『喧ましく言ふな、大きな聲を出すと彼女が目を覺すぞ。』

卓上の煙草をとつて、一ぷく火をつけながらドン・ルイは冷然と言つた。

此の短かい一言が、二人の敵味方を氣絕させて了ひさうだつた。パトリスの手は、兩側にダラリと下つた。シメオンは肢暈してドツカリ椅子に腰を下ろした。

ドン・ルイの手並を知つて居る二人には今言つた言葉の意味はよく解つたのである。

然しパトリスに取つては、斯んな笑談のやうな言葉よりもつと確かな言葉で言つて欲しかつた。

『彼女の眼が覺醒めるんですつて？』と彼は途切れ〳〵に言つた。

『ええ、勿論です……君等が餘り大きな聲を出すと間近かに居る彼女を起しますよ』とドン・ルイは言つた。

『では、彼女は生きて居るんですか？』

『死んだ女をどうして呼び起します。生きて居る女でないと起せませんよ。』

『コラリイは生きて居る……コラリイは生きて居る……』と彼は急に嬉しさがこみ上げて繰り返した。『そんな事が、どうしてあるんです……では彼女は此所に居るのに相違ないんですな……どうか、眞面目に言つて下さい！……ではほんとでないんですか……どうなんです？……私には到底信じられない……笑談なんでせう……』

『大尉、此男に今言つた通りですよ。私は仕事をやり掛けて中途で止めて了ふやうな男ではない。かうと計畫した事は必ずやり遂げますよ。之は私の性格です。そして好い事だと信じて居たら何んでも彼でも物に嚙り付いてやるんです。まあ見給へ。』

彼は部屋の一隅を振り向いて、パトリスが先刻入つて來た戸を蔽ふカアテンを上げた。しかし目には何もはいらなかつた。

『彼女は居ませんよ』とパトリスは殆んど聞き取れないやうな聲で言つた。『僕には信じられない。嘘が餘りひどすぎる。どうか誓つて下さい……』

『大尉、誓ふことなんかありませんよ。君は唯、モット大きく眼を開きさへすれば好いんです。確かに君は佛蘭西の士官としては少し可笑しすぎる恰好をしますねえ。おや、蒼白になつて居るんぢやないですか……勿論彼女ですよ。小母ちやんのコラリイさんですよ。見給へ二人の看護婦に介抱されて、床の中で寢て居る。危險は少しもない。怪我はして居ないんですからね。少し熱が出れば心配なんだが。非常に弱つて居ますからねえ。可愛さうなコラリイさんだ……斯んなにまで疲勞して居ようとは思つて居なかつたが』

パトリスは、彼女のそばに行つて覗き込まうとした。ド

ン・ルイはそれを押し止めた。

『大尉、それだけにして置き給へ。餘り近くへ寄つては駄目ですよ。彼女の家へ連れて行かないで、僕は此處へ連れて來たんです。居所や空氣を變へる必要があると思つたものですからね。然しまだ決して興奮させては不可い。君が顏を出すとヒドク興奮しますよ。』

『成程。然し確かに……』とパトリスは言つた。

『生きて居るかと云ふんですか……』とドン・ルイは笑ひながら訊ねた。『お互が生きて居るのと同じやうに立派に生きてゐますよ、そして君に幸福を齎らさうとするのです。もうすぐにパトリス・ベルヴル夫人と云ふ名に變るんです。ホンの暫く待てば好い。大尉、然し、已に結婚した彼女ですから、此所一つの困難に打ち勝つ努力が要るんですよ』

彼は、戸を締めてパトリスをエッサアレ・ベイの所へ連れて行つた。

『大尉、障害がまだあります。もう決心しましたか……君とコラリイさんとの間に立塞つて居る男こそ其の障碍です。』

エッサアレ・ベイは、ドン・ルイの言ふ事に少しの譫もないのを知つたのだらう、隣の部屋を覗いても見なかつた。彼は、ワナ〳〵と椅子の上で震へた、弱々しく情けなさうに。

ドン・ルイは冷笑して、

『お前は、餘り愉快でも無ささうだね。何が悲しいんだい。脅えて居るのかね。何んでだい、俺達は同じ意見にならなければ何にもしやしないんだよ。がこれで心配はないぢやないか。俺達が裁判官になつて、お前と三人で裁判所を拵らへるんだ。パトリス・ベルヴル大尉とアルセエヌ・リュパン夫れに老シメオンから成り立つ法廷なんだ。さあ、愈々審問に取り掛る事にするか。誰かエッサアレ・ベイの辯護士になり手は無いかなあ。誰も無いさね。逮捕された犯人を死刑と判決す。情狀酌量の餘地は無いか知ら……抗辯は無いのか？いや死刑か？……執行猶豫か？……いや即時の執行だ……』

『解つたらう、執行猶豫は無いんだよ。死刑の執行はどんな風にするかな……ピストルで擊たうか、それが好い。手取り早くした方が世話が無いからな。執行人はベルヴル大尉、彈は込めましたよ。さあ、此所に』とドン・ルイは言つた。

パトリスは、動かなかつた。數々の惡業を積んだ野獸のや

うな悪漢を今見詰めて居るのだつた。身體全體が、憎惡で湧き返つて來た。だが彼は答へた。

『私は此の男を殺し度くない。』

『大尉、私もそれは贊成だ。君のその廉恥心は君を尊くする所以です。君には此の男を殺す權利はないのでした。此男は君の可愛いゝ人の良人だつたのですから。だから君の手で障碍を取除けるわけには行かない。殺すのが厭なのは尤もです。私だつて殺したくない。こんな惡黨は殺す方の汚れです。こいつは、どうしても此惡黨自身の手を借りる他はない、斯う言ふ微妙な境遇を圓滑に處理するにはね』

ドン・ルイはちよつと口を閉ぢてエッサアレの方に眼を投げた。相手は聞いて居るのか知ら？　まだ生きて居るのか知ら？　まるで意識がない者のやうに見える。

ドン・ルイは彼の肩をゆすぶつた。

エッサアレは聲を絞つた。

『金貨、金貨の袋が……』と彼は唸るやうに吃つて言つた。

『おい。まだそんな事を考へて居るのかい、ええ、まだそんな事が氣になるのかい……金貨の袋は俺のポケットにだ……千八百袋の金貨が入るポケットがあればね。』

『隱し場所は……』

『隱し場所かい……俺に掛つちや隱し場所も糞もあるものかい。分つて居るじやないか、コラリイさんが此所に居るんだから。まだ説明して欲しいのか……コラリイさんを金貨の袋の間へ埋めたんぢやないか、夫れから考へて見ろ、すぐ結論が出るぢやないか。まんまと、してやられたのはお前さ、お前が目掛けてゐた女は、自由になつたんだよ、猫惡い事には死んでも離れ度くないと云ふ男の友人の力で、自由になつたのだ。ついで乍らに、寶物が見付かつたよ。それで萬事終りぢやないか、え……解りましたかい。さあ。お前を放免する玩具が此所にあるんだ。』

彼はピストルを渡した。エッサアレは無意識に受け取つてドン・ルイを覗つた。然し彼の手は力が抜けて居て、とても覗ふどころか、ピストルは下へ落ちて了つた。

『おい、親分、お前と俺とは御互によく知り合つて居る筈だ、今お前がしようとする事は罪惡の生涯の償ひになるんだぜ。さあ、最後の望みが無くなれば、死ぬより外は無いぢや

ないか。死は最後の避難所だ』とドン・ルイは言つた。

彼はエッサアレの手を引摑んで、もう感覺が無くなつて居る指を引き開けて、無理やりにピストルを握らせた、彼自身の顏へ覗ひを定めた。

『さあ、お前が決心した事は誠に好い事なんだ。ベルヴル大尉と俺とはお前を殺すやうな不名譽な事をしないから、お前自身でやるんだ。俺達は感動して居るよ。又お前の爲めに喜ぶのだ、然しお前も惡黨なら勇氣を出してやらなけりやならんぞ。止めないんだから、それは正しい事だ、そして又願はしい事なんだ。も一度云ふがね、斯んな風に此の世をお暇するのは最も賢い方法なんだよ。お前も知つてる通り、お前はもう此の世界に居る場所がないのだ、お前は、パトリスとコラリイの爲めに邪魔になる仲間だ、だから一番好いのはお暇申す事よ。戀も無ければ金もないのだ。金はもうないのだ、なあシメオン。貧つて居たあの美しい山吹色の金貨で、愉快な生活を送らうと思つて居たんだらうが、總ては逃げて行つたよ、消えて行つたよ。だからお前もそれと同じやうに消えて行くのが正當な事だ。』

彼は、ジタバタしても駄目だと思つたのか、或は、眞にドン・ルイの言つた事を成る程と思つたのか、それとも生き甲斐が無いと思つたのか、少しも逆らはなかつた。ピストルは額の所まで持ち上げられて、銃口が顳顬へ當つた。

冷たい鋼鐵が觸れると、彼は唸り出した。

『お慈悲だ！』

『いけない、駄目だ。もう斯うなつたらお慈悲など願ふものぢやない。どんな事があらうとも俺達は助け度くは無いのだ。俺も、お前が俺のヤ・ボンさへ殺さなかつたら、又何とかお前の最後に就いても相談に乘らない事は無いのだが、お前が俺に對しては慈悲も情も持つて居ないやうに、俺もお前に對してその通り情を掛ける事は出來ないぞ。お前は死に度いのだ、それは好い事だよ俺は決して止めないよ』

『それに、お前の旅行免狀も出來て居るんだからね、切符もポケットの中に入れてある。お前が地獄へ降りて行くのを皆が待つて居るんだ。な、もう何も退屈する心配は要らないんだよ。お前は地獄の繪を見た事があるかい。皆んな墓の上に大きな石を持つて居るよ、そして下から焰が憤き出して來な

いやうに石を持ち上げたりして居る。まあ、色々面白い事が澤山あるよ。さあ、お前の墓はチャンと用意が出來て居るんだ。お前の方も用意は好いか？』

彼は緩くりと、又、根氣よく、此の惡黨の指を、ピストルの柄の所まで滑らせて、引金に指を掛けさせた。エッサアレは、されるが儘になつて居た。彼は、もう、屠所の羊に過ぎない。死の影は、彼の上に差して居る。

『考へて呉れ、好いか、お前は全々自由なんだぜ。お前が好いと思ふ時に引金を引けば好いんだ。俺はお前に自殺を強ひて居るんぢやないんだ、單に忠告する丈けさ。そしてお前に手を貸してやるんだよ。』

言ふ通りその指を離して、たゞ相手の腕を握つて居るばかりであつたが、彼の力强い意志はエッサアレの上に働いて居た。壞滅させんとする意志、殺さうと云ふ意志、是等の到底打勝ち難い意志に支配されてエッサアレは抵抗する事も出來なかつた。

刻一刻、彼の頑固な身體に死が迫つて來た。彼に、總ての本能を忘れしめ、思考を止めさせ、そしてたゞ安息の憧憬のみを齎らす死が近づいて來たのだつた。

『さア、何でもない事だらう。頭がうつとりとして、却つて氣持が好いだらう。ね、確かに解脫され、生活を止める。煩惱が止まる。お前の物でない金貨、二度とお前の手に戻らない金貨の事を考へる事が止まるのだ。よその男に抱かれ、よその男に接吻を許し、喜んでその男に身を捧ぐる自分の女房を考へる事が止まるのだ。とても、そんな事を考へながら生きては居られまいだらうからな、だから死ぬるのさ……』

惡黨も今は心もしなびてしまつた。此の自滅を急がせる力、運命のやうに壓迫して來る力から遁れる事が出來ようか。ぐら〳〵として頭が宙に浮くと同時に、底深い地獄の中へ蹶落とされた氣持ちである。

『さあ、男らしくやれ！……でも此所で一度死んだ事を決して忘れてはならぬぞ……記憶しろ……エッサアレは永久に死んだ。正義の味方のために非ざる限り、二度と此世に浮ぶ勿れだぞ。勿論私は此世の正義を支配する者だ。だから、此所は牢獄であり、斷頭臺である。斷頭臺。ほら、寒い夜明け……氷の刃で……』

もはや萬事は休した。エッサアレは暗黑のドン底へ突落された。總ての物が彼の廻りをぐるぐる渦卷いた。ドン・ルイの意志は彼の意志を貫いて全く壓服しをはつた。

時々、彼はパトリスの方を向いて、彼の助力を乞はうとした。パトリスは冷酷な態度で只眺めて居る計りだつた。兩手を組んで立つたまゝ父を殺した男には慈悲も情けも無いと云ふやうに見詰めて居た。此の刑罰こそ彼に適はしいのだ。運命は自然の途を辿らなければならない。パトリスは一言も口に出さなかつた。

ドン・ルイは無慈悲な言葉を淀みもなしに續けた。

『さあ、どうだ！……それは永久の休息に過ぎないのだ！……何んと言ふ甘い休息だらう。總ての事を忘れ、其處にはもう爭鬪は無くなる。……三億の金も、もう無くなつた。そしてコラリイも同じく失はれて了つた。母と娘、お前は、孰の一つも得られなかつた。さうなれば一生は全く幻想と欺瞞に過ぎなくなる。だから此の世を去るのがお前の尤も賢明な方法だ。さ、ホンの僅かの努力だ、指一本動かせばそれで好いんだ……』

指一本！　惡黨はその指一本を動かした。殆んど無意識に引金を曳いた……。彈丸の響は部屋中に反響した。そしてエッサアレは前に倒れた。ドン・ルイは、此の男の頭に迸しる血潮を避ける爲めに、横の方へ飛び退かなければならなかつた。

『畜生！　惡黨の血！……こんな物が掛かると不幸になる。でも神樣。何んと極惡な男でせう。今、私は、生涯の裡で最も好い事をしたと思ひます、此の男に自殺をさせたために、私も天國の端へ入れて下さるかも知れない、おゝ！　私は慾深ではないのだ……幽界の安らかな椅子をのぞむだけで。大尉、どんなものでせう？』と彼は叫んだ。

光明遍照

同じ日の夕方、パトリスはパッシイの荷揚場附近を彷徨ふて居た。六時頃である。時々、電車や荷車などが通るだけで、通行人は至極稀だつた。殆どパトリス一人だと言つても好い。

まだドン・ルイ・ブレンナとは今朝から一度も逢つて居ないのだつた。たゞ、ヤ・ボンの死骸をエッサアレ邸に運ぶ事、ペルトウの波止場の上で會見したい事を頼んだドン・ルイの手紙を貰つただけだつた。

待合せの時間はもう直ぐだつた。パトリスには嬉しい會見である。事實のすべてが釋明される時が、遂に來たのだつた。此等の事實、ほんの一部分だけでも想像して見よ、一部分だけでも、測り知れぬ暗黑だ！　解き難い謎だ！　悲劇は既に大詰めを終つた。幕は惡人の死滅と共に降りた。目出度し萬歳である、もはや何者を怖れ、何者に陷し入れられる事があらう。憎むべき敵は滅び去つた。けれども、まだ張り詰めた焦心を以つて、パトリスは待つのであつた。此の戲曲の上に、光明の釋然と投ぜられる瞬間を待つのであつた。

『ほんの僅の言葉が』とパトリスは呟いた。『此のリュバンと名乘る奇怪な男のほんの僅の言葉が不思議な事件の眞相を解決して呉れるのだ。あの男にとつては別に手間の取れる事でもない。一時間後にはもう片附いてゐるんだ。

『金貨の秘密を探り得て行くだらうか。金三角の秘密を果たして解き得て呉れるであらうか。そして、もう金貨は手に入れて了つたのか知ら。然し、どう云ふ方法で金貨を運び去るのだらう』

自動車がトロカデロの方向から疾走して來た。歩道の所で速力を緩めて止まつた。ドン・ルイに違ひないとパトリスは思つた。併し驚いた事には、自動車の戸を開けて、彼の方へ手を差し出した男は、ドン・ルイではなくつて、デマリオン氏だつた。

『やあ、大尉、どうです　御機嫌は、私は待合せの時間に合ひましたか知ら？　え、然し、又頭に怪我をしたんですか？』

『何……大した事はありませんよ』とパトリスは答へた。『然し貴君はどうして會見の時間の事なんか仰言るんです』

『どうしてつて？　君から知らせて來たでせう？』

『貴方に何にも知らせはしなかつた筈ですが。』

『おゝ！　おゝ！』とデマリオン氏は驚いて。『何と言ふ事だ！　御覽なさい。誰かゞ警視廳の私へこんな手紙を寄越したんです。讀みますよ「ペルヴル大尉より、デマリオン樣へ。金三角の問題は解決仕り候。千八百袋の金貨は我ら

の手中に之有、御引渡し至すべく候へば、政府側の全權を擔つて、六時までにパッシイの荷揚場にお出下され度候。就ては二十人の憲兵を引率相成り、その一半をエッサアレ邸の前方百メエートル附近に置き、他の一半を御身邊百メエトルの邊りにお備へ下さるやう、御準備願上げ候」と書いてあるのですが分りませんか？』

『よく分りました、然しそんな手紙を出した覺えがないんですが』とパトリスは言つた。

『では、誰が書いたんでせう』

『大きな謎をまるで遊び半分に解決したどえらい人が書いたのです、手紙の主自身がもう直ぐ此所へ來ますよ』

『何と言ふ人です？』

『名前は一寸言ひ兼ねます』

『おゝ！　おゝ！　職時中はどうも秘密も保ち難いですからなあ。』

『保てますよ、いや何でもない事です』とデマリオン氏の背ろで誰かが言つた。『たゞ意志さへ固かつたら好いのです』

デマリオン氏とパトリスは後を振向いた。其所にはフロックコオトのやうな長い黑い外套に、英吉利僧侶のやうに高いカラアを着けた紳士が立つて居た。

『此れが今私が言つた友達なんです』とパトリスはドン・ルイだと云ふ事はよく解らなかつたが言つた。『此の友達は二度も私と、私が此れから結婚しようと云ふ婦人の命を助けて呉れた人です。で、私は非常に感謝して居るんです』

デマリオン氏は一寸會釋した。ドン・ルイは唐突に、然し正しい抑揚で言つた。

『御免下さい。時間は貴方も御大切で御座いませう、私も同樣です。私は今夜巴里を立ち、明日佛蘭西を去らなければなりません。ですから說明は輕く簡單に致しませう。貴方も、此の朝やつと解決のついた戲曲の大詰に就いては、これまで、ずゐ分御探求なすつた事ですし、御不審の點はいづれペルヴル大尉が御說明申上げませうしますから、私は簡單に申上げるに止めます。且つ、御職掌柄と言ひ、感受性と言ひ、此問題に對しては非常に銳敏で被在るから、不明の點があつても容易に御諒解がつくと考へます。で、只要點だけ申上げませう。斯うです、我々の哀れなヤ・ボンは殺されまし

た。さうです、彼は今曉勇敢に敵と組み打ちながら倒れました。その外三人の死者がある。あの運送船内のグレゴアール――本名はモグラネム夫人と言ひます――それからギアアル街十八番地の貸間家のどこかにあるヴシュロオといふ小男、もう一つはモンモランシイ通りにあるジェラデックの病院で死んだシメオン・デイオドキスの三人でございます。』

『シメオン爺が？』デマリオン氏は非常に驚いて訊ねた。

『シメオン爺は自殺です。此男の人物や閲歴に就てはベルヴル大尉が詳細に知つて居ますから、あとで大尉から、事件の釋明に必要なだけお聞き下さる事と信じます。ですが、こんなお話は止めませう。貴方の御使命から見れば、過ぎ去つた閑話に過ぎません。貴方のために第一の物、貴方の感興を最も惹く物、それは他ならぬ金貨の問題です。さうぢやありませんか？』

『さうですとも。』

『お話ししませう。部下をお引連れ下さいましたか？』

『連れて來ました。が、、何の用になさるんです？ 隱匿所は、私にお話しゝてさへ下さつたら、無關係な人が發見する怖れはない筈ですが』

『勿論です。然し知る人がだん〳〵澤山になれば、秘密つて奴は、つひ漏洩したがりますからね。兎も角』とドン・ルイは此處で非常に清朗な音調となつて『兎も角、これは私の條件の一つです。』

デマリオン氏は微笑した。

『成る程、仰言る事はよく解りました。部下は配置してあります。ですが條件の、他の一つは？』

『此れは更らに嚴要な條件ですよ。貴方にどれ程の權限を與へられてゐようが、それだけではまだ不充分と思はれるやうな事なのです』

『何ですか？ 聞かして下さい。御相談しませう』

『承知しました』

そしてドン・ルイ・ブレンナは、無意味な話でもするやうに、すつかり落着いて、彼の驚くべき物語を冷やかに始めた。

『二ヶ月以前です。東洋に居る一味の者のおかげで、それから土耳古の一部の人士間に於る私の勢力を利用して、私は、

土耳古を實際に動かして居る或る政黨に、單獨媾和の意志がある事を嗅ぎ付けました。たゞ數億の金を握らせさへしたら、譯なく片附く所だつたのです。此旨を、私は聯合國に提言したのですが、拒絶されました。財政上の理由からではなく、寧ろ私などが忖度出來ない政治上の理由からでした。これは、ほんの小さな外交遊戯ですが、私はとても泣寢入りに濟ます事は出來ない。第一の交渉には失敗した。が第二回の交渉に負けてはならない。それだから、何所までも慎重な態度を執りたいのです』

彼は暫く言葉を切つた。デマリオン氏は呆氣に取られてぼんやりして居る。そこで彼は言葉をつゞけた、――今度は前よりも一層おごそかな調子である。

『今日只今、それは千九百十五年四月です、御存じの通り、聯合國と歐州に殘る最後の大中立國との間に列國會議が開かれて居る最中です。會議は將に成功せんとして居る。それも當然の話ですよ。その大中立國は自身の將來のためにも是非とも此の會議を成功さして參戰しなければならないのですし、その國民も亦熱情的に後援して居るんですからね。

『然し討議した問題の中で意見の相違を成す物が出來たのです、それは金錢上の問題です。で、此の大中立國は我々の國に、三億金貨法の公債を應募して呉れと要求して居るんです、若し此の要求を我が國が拒絶した所で、今迄成立した協定が、少しも骨拔きにはならないとしてです。所が、今私は三億金貨法の金を持つて居ます、目前三尺の所にです。だからその金の處分は私の意志の儘になる。私は此の金を、我が新聯合國に提供しようと思ふのです。此れが實際、私の所謂第二にして、實際では唯一の條件なんですよ。』

デマリオン氏は呆然とした。此男の話る意味は何か？ 最高の問題を捉へて手玉に取り、世界戰爭の委曲に、個人的解釋を吐露する此男の、憂慮する所は何であるか？

彼は言つた。

『然し、貴方、そんな事は我々の埒外の問題ですよ。我々以外の者が檢討し、決定すべき事です。』

『所有權者は自分の思ふまゝに、それを處分する權利があります。』

デマリオン氏は困つたやうな容子で、

『が、お考へ下さい。たつた今、貴方は御自身の口から、例の中立國は、此件を第二義的にしか考へて居ないと仰言つたぢやないですか』

『言ひました。然し、單にそれを附議する手間だけで、片附く協定を、二三日も遲延させる事に成るのですからね』

『はゝア！二三日の違ひなら、影響を及ぼす事はない』

『二三時間の違ひでも影響を及ぼす時は及ぼすんです』

『ですが、何故です』

『貴方にも分らなけれア、誰にだつて判らない、或る理由からです。……たゞ、私と、それから約千五百哩も遠い所に居る數人の人間が知つてるばかりです』

『その理由といふのは』

『露西亞軍に、もう何の軍需品もなくなつて居る、といふ理由です』

デマリオン氏はじれつたさうに肩を搖つた。一體斯んな話が此の事件にどんな關係があると言ふのだらう？

『露西亞軍にはもう軍需品が殆んど無いんです』とドン・ルイは又繰返して言つた。『東部戰線では激戰が開始せられて居るのです、どうせ、數時間で勝敗が決するのは分り切つた話です、露西亞軍は退却に退却を重ねなければならないのでせう……退却を何時になつて止めるか？　誰にも判らない。此の不幸は――勿論此の不幸が、例の中立國の希望に影響がある筈はありませんがね。然し、何にしても其國の獅子身中の蟲である中立說の黨派が、露軍敗退と聞けば、益々勢力を得るでせう。協定が出來なかつたら、如何に我々に危險か！此國の爲政者をして參戰に傾かしめる事が如何に困難となるか！　で我國を救はうとする希望に對して、それは許すべからざる過失となるのです。ですから私はこんな條件を持出しましたのです』

デマリオン氏は聊か困つたやうに、頭を振り、手を動かしながら言つた。

『それは不可能です。そんな條件が諾かれた例しがない。時間が要ることです……そんな相談は……』

『時間は五分……せい〳〵六分位で十分ですよ。』

『然し、貴方、貴方は色々の事を……』

『色々の事ですが、私は誰よりもよく知つて居る。餘りに明白な或る狀態です。餘りに貴寶な一つの危險です。だが忽ちにして迫拂ひ得る危險です』

『然し、そんな事は不可能です。不可能ですよ！　困難なばかりですね』

『どうしてゞす？』

『いや』とデマリオン氏は叫んだ。『あらゆる困難、とても仕樣のない無數の障碍があるのは……』

誰か、ドン・ルイの言つた事を聞いて居たらしい男が其所に現れて、彼の腕に手を掛けた。向ふに待たした自動車から降りて來た人であつた。パトリスが驚いたのは、此の男がやつて來ても、ドン・ルイもデマリオン氏も別に反抗がましい事を口に出さなかつた事であつた。彼はもう大分年の寄つた、强い、シッカリした顏の男だつた。

『デマリオン君、君は此の問題を正當な見解に基いて見ては居ないやうだね』と男は言つた。

『左樣で御座います、私もさう思つて居るので御座いますよ。大統領閣下』とドン・ルイは云つた。

『あ……君は僕を知つて居ますかね』と新來の人は言つた。『ブラングレイ樣ぢや御座いませんか？　大統領閣下でございませう。私は數年前に、閣下が內閣議長をしてゐらつしやる時一度お目に掛つて頂いた事が御座いました』

『うん、さうでしたね？……私は記憶は確なんだが……然しどうも確かには思ひ出せないんですが……』

『いや、御記憶をお辿りになる必要は御座いません。過去の事は、何等之れとは關係は御座いませんのですから。私の意見に御同意下さる事が、何よりの事と存じて居ります』

『僕は君と意見が合ふかどうか知らないがね、然し、君の意見と違ふやうな事はないと思ひますよ。然し、デマリオン君。君が此の紳士の言ふ條件をかれこれ云ふべきではないと思ふ。之れは議論の問題ぢやない、受け容れるか拒絕するかの問題だ。條件に就いてグズ〳〵云ふやうな取引ではないよ。取引と言ふものは、御互に物を出し合ふものだ。で今、我々には差し出すべき物がない。だが此の紳士は「三億法の金貨は要らないのか？　若し要れば之れで以つて斯々をしなければならない、若し夫れが氣に入らなければ話は打切らう。」と

申し出るんだ。さう云ふ譯ぢやないか、ね、デマリオン君、よく分つた話ぢやないか？』

『左樣でございます。』

『さうだ、そこで我々の友達を無視する事が出來るかね。此の紳士の助を借りなければ金貨が匿してある所が解るかね、君を其所へ連れていつて何所にあるかを容易く數へて呉れるのは此の紳士だと云ふ事を考へて見なければならない。それで好いぢやないか。それとも君が數ヶ月も掛つて探して居た金貨の秘密を發見する望みがあるかね』

デマリオン氏は躊躇せず非常に正直に答へた。

『御座いません。閣下』彼はハツキリと『私にはそんな望みはございません』

『宜しい、それでは……』

それからドン・ルイの方へ向つて、

『ぢやなんですね、それが君の最後の言葉なんですね？』とヴラングレイは訊ねた。

『最後の言葉で御座います』

『若し我々が拒絶したら、……おさらばですか？』

『それに相違御座いません、大統領閣下』

『そして我々が若し承諾すればその金を直ぐに引渡しますか』

『ええ、直ちにお渡し致します』

『その條件承知だ』

それは非常にハツキリした言葉だつた。前議長は大取引を設定するに、ほんの一寸した身振しか出さなかつたのである。

そして暫らくの間を置いて、彼は繰り返して言つた。

『承諾しました。今晩、大使に訓令を發する事にしませう』

『では、誓言をして下さいますか』

『誓言しませう。』

『それでは私も決して破約致しません』

『これでお互に同意したんだ』

是等の言葉は手早く進行した。前の内閣議長が此の場に來てから、五分とは經つて居ない。もうドン・ルイが約束を守る事しか何物も殘つて居ない。もはや何の遁辭も、餘言もない。事實である。實證である。

それは誠に嚴肅な瞬間であつた。四人が互に接近して立つ、恰も散歩の途中で遇つた友人が、御互に話し合つて居るやうに。そしてヴアラングレイは下方に荷揚げ場を見る欄干に片手をのせながら、セーヌを眺めたり、右手に持つたステツキで、積んだ砂を換き廻はしたりして居た。パトリスとデマリオン氏は顏面を引吊らせた儘立つて居た。

ドン・ルイは笑つた。

『大統領閣下、私が魔法の杖か何んぞで金貨を此所へ持つて來たり、その杖の先きで、金貨のある所をお見せする事が出來るやうに思つて下さつては困ります。私も常に「金三角」と云ふ言葉を間違へて考へて居りましたので、何か作り話しにでも出て來る、魔法の言葉のやうに思つて居たのでした。然し今になつて解りましたのは、金を積んだ形が、三角形になつて居る事が解りました。要するに、金三角と云ふのは三角形に置かれた金貨の山でございます。そして現實は餘りに單純ですから、閣下もお誑まされなすつて居る事と思ひます。』

『僕の顏を千八百袋の金貨の方へ向けて貰ひさへすれば、誑されないで濟むね』とヴラング レイは言つた。

ドン・ルイは言つた。

『敢て申上げますが、そのお誓言は誠でございますか？』

『僕の顏を金貨の袋の方へ向けて下ざりさへすれば、誓言に絶體、嘘はない。』

『閣下、もう、ちやんとお顏を金貨の方へ向けて被在います』

『え、私が顏を？……何を言ふのです？』

『確かにさう申し上げます。もう金貨に殆んど觸れようとなさつて居るのです、是れ以上金貨の方へお近か付け申す事は出來ません』

隨分自制はしたものゝ、彼はとても驚きを隠す事は出來なかつた。

『暗示的な事を言つて居る君とも思へないから、僕が金貨の上を歩いて居るのかね、舗石を持上げるか、此の欄干を壞せば好いのだと言ふのかね、どうだね』

『それは確かに邪魔物を除く事にはなりませうが、貴方と、貴方がお探しになつて被在る金貨の間にはそんな邪魔物が御

座いません。』

『邪魔物がない……』

『御座いません、閣下、金貨にお觸りになるのにはもう、極く僅かの運動をなされば、それで好いので御座いますよ』

『も少しの運動……』とヴラングレイはドン・ルイの言葉を無意識に繰返した。

『私は少しも努力の要らない運動と申します。殆んど其の場を動かないで、水に杖を突込むやうに……或は……』

『或は何？』

『さうです或は、砂山の中を』

ヴラングレイ默つたまゝ不動の姿勢で居たが、肩は微かに震へて居た。彼は言はれた運動をしてみなかつた。爲る必要はなかつた。もう彼には何もかも解つたのだつた。

殘りの二人も亦一語も言はなかつた、稻妻のやうに閃いて來た此の驚くべき事實が、餘りに簡單だつたので啞のやうになる他はなかつた。

此沈默を破る抗議の言葉も、疑問の聲もなかつた。ドン・ルイは靜かに語つた。

『大統領閣下、若しお疑ひになれば……お疑ひになつても居ますまい！……閣下のステッキで堀つて御覽なさいませ。まあ二十吋あるかなしかで、閣下の杖が何か固い物に當つて、それ以上堀れなくなります。それが金貨の袋なんで御座います。確かに千八百袋ある筈で御座います。御承知の通り、金貨はそう大した量になるものでは御座いません。一キログラムの鑄造は、丁度三千百法になります。ザット私が計算して見ますと、一袋は五十キログラム、即ち十五萬法の金貨が一袋にしてあるものと思ひますから、袋と言つてもさうたいして大きいものとは思へません。そしてそれを積み重ねて、ピラミッドの樣な恰好にして居るのでございませう。すると、底になつて居る邊の長さは、長くて三ヤード位のものでせう、三ヤード半にするには少し金貨の袋の數が足りないかも知れません。高さは殆んど壁の高さ、位ですかね。さうしたあとを總て砂で覆ふて了つて居るのです。……ですから閣下のお目の前に其の塊があると云ふ譯で……』

ドン・ルイは暫く休んで又言葉を續けた。

『さうして閣下、此の金貨は三箇月も以前から探しに掛つて

居る人の眼にも、或る事件の爲めに滯在して居た私の眼にも、付かずに居つたのでした。考へても御覽なさいませ、砂の一塊？ 誰が此の中に何があるだらうと思つて堀つて見る醉興を起しませう……犬はその上を嗅ぎましたらうし、子供はその側で遊んだでせう、或は泥饅頭を作つて遊んだかも知れません、又時々其の上に足跡を刻んだ人も、その上で午睡した人も御座いませう。雨が降つては砂を柔らかにし、照つては硬くし、雪が其の上に白い敷布を掛けた事も御座いませう。然し是等は皆表面の出來事で御座います。然し、內部は依然として測るべからざる不可思議と暗黑とを藏して居つたので御座います。誰の目にも付く砂山の中ほど、此の世の中に好い隱し場は御座いません。閣下、三億法の金を隱す爲めに、此の場所を使はうと思つた男は、其の邊の事情によく通じて居つたもので御座います』

前內閣議長はドン・ルイの說明を、一言も言葉を挿まず聞いて居た。ドン・ルイが言ひ終つた時ヴラングレイは一二度頭を領かせて言つた。

『實際其奴も上手にやつたんだが、それよりもまだ賢い人があつた……ね。』

『それは信じられません』

『いや、さうです。砂の塊の下に、三億法の金貨が隱してある事を覺つた人があるんだ。その人は確かに先生だ、そして我々は此の先生に、頭を下げなけりやならない』

ドン・ルイはこのお世辭を聞いて帽子を取つた。ヴラングレイは、握手を求めて手を差し出した。

『我が國の爲めに盡して下さつた功績に對して、如何なる表彰の形式を執れば好いか、まだ考へが付いて居ないのです。』

『私は、何にも報酬を望んで居る譯では御座いません』

『然し乍ら、我々よりもズット力强い國民の輿論が、君に對して熱誠な感謝を、惜まないだらうと信じる』

『大統領閣下、そんな事が必要なのでせうか？』

『僕は、それは必要な事だと思ひます。どうして君が此の秘密を發見したか、敎へて下さいませんか……で、役所へ一時間でも來て下されば誠に結構だと思ひます』

『誠に殘念で御座いますが、私はもう十五分經てば、此の地を去らうと思つて居るので御座います』

『いや、いや、そんなに早く此所を去つては可けませんよ。』とヴラングレイは重々しい口調で言つた。

『なぜ可けないんで御座いますか……』

『我々は君の名も知らなけりや、身分も知らないんですから』

『そんな事は、どうでも好いぢや御座いませんか……』

『平和の時ならいざ知らず、戰時中はどうもそんな事はしたくないんです』

『閣下、私の場合だけは例外にして下さると存じますが』

『おゝ！　おゝ！　例外……』

『若し私が報酬として例外にとお願ひ致しますにも、閣下は拒絶なさいますか……』

『それだけは勘忍して貰ひたい。君も、もうそんな報酬は望まない筈です。君のやうな善良な市民は、誰でも服從しなければならぬ「要求」は、よく理解して呉れる筈です』

『仰言る所の「要求」は、私も非常によく理解して居ます。大統領閣下。けれども不幸にして……』

『不幸にして？』

『私には服從の習慣がございません』

ドン・ルイの語調には、どこか人を馬鹿にしたやうな響があつた。がヴラングレイはそんな事には氣が付かないで、微笑しながら、

『悪い習慣ですな。今度だけは、そんな習慣を捨てたらどうです。デマリオン君が巧くして呉れますよ。ねえデマリオン君、君も此のお願に就て此方とよく御相談しておいて呉れ給へ。役所へね、一時間のうちに、好いかい？　一切君に信頼するよ。……さやうなら。待つて居ますよ』

そして丁寧な挨拶をして、デマリオン氏に送られて、愉快さうに杖を振りながら彼は自動車の方へ歩いて行つた。

『さやうならだ。ところで、君にまだ一つ役がありませうよ。まあ僕の光つた眼で見ると、君は三億法の金を受け取つて、新時代を劃するやうな條約に調印したら、今度はアルセエヌ・リュパン逮捕の命令を發しますかね……』とドン・ルイはクツ〳〵笑ひながら言つた。

『何を言ふのです？　貴方を逮捕するつて……』とパトリスは極度に驚いて叫んだ。

『ちよつと來いと命令して、僕に紙を渡すんだ。それから先きの事は悪魔がよく知つて居る』

『それは餘りに無茶ですな』

『大尉、それは此の國の法律ですよ。我々はどうしても服從しなければならない』

『然し……』

『大尉、まあ僕を信じて下さい。例令どんな不愉快な事があつても、我が國に對して盡した大なる功績を考へて見る時、私は非常な滿足を感じるのです。そして此の滿足はどんな事が起つても失はれる事はありません。戰時中、僕が滯在して居る時を利用して、佛蘭西の爲めに何事か盡し度いとは、兼てから思つて居た處です。そして今、夫れを成し遂げたのです。それからまた、も一つの報酬も受けたのです。四百萬法。それは、コラリイさんの財産ですが、……コラリイさんは、そんな金に手をつけるのは、考へるのも厭だとお思ひでせうから』

『私が彼女に代つて保證しませう。』

『やあ有りがたう。實際私もこれは有効に使つて見せますよ。一法だつて、國家の成長勝利以外の目的には決して費ひません。萬事解決しました。然し私は君の爲めに、數分間の時間を割きませう。そしてその時間を有効に使ふ事にしませう。デマリオン氏は今頃、部下を集めて居ますよ。彼奴等の仕事を容易にもしてやり、又こちらの凌辱も避ける爲めに、下の方の波止場の砂山へ行きませう。其處は僕を引捕へるのに最も都合の好い場所なんですから。』

二人は階段を下りて行く。その時パトリスは言つた。

『私は貴方の貴重な數分間を、お受けしませう。第一にお詫びしたいと思つて居るのは……』

『何に對して？　小屋の書齋の中へ、僕を閉ぢ込めたと言ふ、小反逆に對してですか……君はあの時萬止むを得なかつたのだ。何しろコラリイさんを助けたいの一心だつたからね。それから、金貨を發見したら、私が横領すると君が想つた事に對してゞすか……これも無理はない事だ、アルセエヌ・リュパンが、三億の金をそんなに輕視しようとは、夢にも想はなかつたでせうからね？』

『ぢや、もうお詫びはしない事にしませう。然し、心から感

謝させて頂きます。』

『何をです？　君とコラリイさんの命を助けた事ですか？　そんな事はお禮に及ばない。善人の命を助けるのは道樂なんですからねえ』

パトリスはドン・ルイの手を固く握つた。感動を押し隱しても、言葉は切れ〴〵になつて了つた。

『ではもう御禮も云ひますまい。それから、あの惡黨の子でない事を證據立てて、私を迷夢から救つて下さつた事も言ひますまい。私は今コラリイを自由に愛し、光明の世界が眼前に展開されて居る幸福な男になつて居る事も言ひますまい。いや私は此の事に就いては、話し度くないんです。然し、打ち開けますと、僕の幸福はまだ小さいものです……さあ何んと言ひませう……まだ不確かなと言ひませうか、臆病なとでも言ひませうか？　私はもう疑つて居ません。然し私は眞相をよく知らないんです。だから知つて了ふまでは、何んだか心配でならないんです。だから話して下さい……說明して下さい。私は是非共知り度いんですから。』

『而もその眞相は非常に明白なものですよ』とドン・ルイは叫んだ。『非常に込み入つた事は、常に案外簡單なものだ！　また解りませんかね……第一問題は何から始まつて居るか考へてごらんさい。十六七年以前にはシメオン・デイオドキスは好い友達、一口に言へば我を忘れて君に盡して居たんですから、ほんとにお父さんのやうだつたんです。復讐の事はさて置いて、君とコラリイさんの幸福を冀ふより他に、餘念は無かつたんです。君達を夫婦にしようと思つたり君等の寫眞を集めたりしたんです。そして殆んど今にも君等の生活に觸れようとした。それで君に木戸の鍵を送つて會はうとした。その時、突然、思ひ掛けもない變化が起つた。彼は君等の不俱戴天の仇になつて、君等を殺して終ふ事より外は何も考へなくなつて終つた。これ程掛け離れた心は何所にあります？　一個の事實、それだけです。或は一つの時日です。即ち四月三日の夜、その夜に悲劇が起つて、又次の日にエッサアレの家に悲劇が起つた。その日まで君はシメオン・デイオドキスの息子だつたんです。其の日から以後はシメオン・デイオドキスは怖ろしい敵になつたのです。

『之れ丈け暗示しても解りませんか？　實際不思議な變化で

す。で僕は最初此の點から出發して大體を見渡したんです、それが爲めに總ての事が解つて來たのです』

パトリスはそれに答へないで頭を振つた。彼には解らなかつた。此の謎には矢張り測り知る事の出來ない秘密があるのだつた。

『坐りませう。此の我々に取つては有名な砂の上へ。そしてよく聞き給へ、十分聞も要らないから』

二人はベルトウの渡止場へ行つた。夕闇は追々迫つて來て、川の向ひ岸が見えなくなつて來た。運送船は物憂げに荷揚げ場の所に繼がれて居る。

ドン・ルイは次のやうな言葉で說明した。

『君が書齋の外廊にかくれて、エッサアレ家で起つた悲劇を見たその夜、攻擊を受けた二人の男を見ましたね。それがエッサアレ・ベイとシメオン・デイオドキスだつたのです。二人はもう死んで終つてゐます。此の二人の中の一人が君のお父さんなんです。第一番にエッサアレの方からお話しよう。その晩のエッサアレ・ベイの地位は非常に危かつたんです。勿論ドイツ系の東方の國の爲めに金貨を流出さしてから、彼は集めておいた殘りの數億法をごま化さうとしたんです。花火で通信して、ベル・エレヌ號を呼び寄せてベルトウの渡止場に沿つた所へ繫がせたんです。金貨は夜の裡に砂山から運送船へ積み込むつもりだつた。凡てが殆んど上手に行き掛けて居る時、シメオンの密告によつて突然一味が割り込んで來た。

『それから强請りの場が宜しくあつて、ファッキイが死に、それからまあ色々な事があつた譯ですね……所が、エッサアレは襲擊されると同時に、一味が彼の大金横領を嗅ぎ付けた事と、ファッキイが其所へ密告の手段を仕掛けて了つて居たのを知つた。彼はそこで進退谷まつた。どうする事も出來なかつたんです。逃走しようか？　戰時中に逃走なんて到底出來ない相談です。それに逃走すれば金貨を捨て又同時にコラリイさんを捨てる事になるのです。だから彼の執るべき唯一の途は姿を隱す事です。そして姿を隱しても、依然として元の戰場、即ち金貨のある所、コラリイさんの被在しる所に止まつて居る算段をしなければならなかつたんです。夜が來て、その計畫を首尾よく實行したんです。エッサアレの話は

大抵まあ是れ丈けにしておいて、今度は第二の人物シメオン・デイオドキスの話に移りませう』

ドン・ルイは一寸一服した。熱心に彼の言葉を聞いて居たパトリスは、彼の言葉に由つて今しも暗夜に微かな光明が差し來んで來たやうな氣がした。

『シメオン・デイオドキスとして知られて居た男こそ、取りも直さず、君のお父さんのアルマン・ベルヴルの事です。さうですとも。それに疑ひの餘地はないでせう――コラリイさんのお母さんと一緒に、エッサアレの毒手に罹つたけれども、その毒手から彼だけ免れて生殘つた。彼の經歷はそれから全く變つたのです。彼は殆んど自分の目的を遂げる間際まで漕付けた。即ちエッサアレと言ふ仇と同居し彼を裏切つて、彼をフアッキイ大佐とその一味の者の手に引渡した。その上君とコラリイさんを一緒にする事も大方成功しかけて居た。君にあの鍵を送つて、四五日中には思つて居た通り、事が運ぶものと思ひこんで居たのでした。

『然しその翌朝、目が覺めた時、何んだか蟲の知らせで胸騒ぎがしたんです、之れは勿論エッサアレの企みを豫感したのでせう。あの人も君と同じやうな疑問を起したんです。エッサアレは一體何を計畫して居るのだらう？　彼方で何をしようと思つて居るのだらう。それで彼は、一刻も猶豫せずに、君に電話を掛けて警戒させようとしたんです。もうその時は事態既に切迫して來た、危險は眼前に迫つて居る。エッサアレは二度目の犧牲にしようと定めた男をジッと狙つて居る。恐らくシメオンは追ひ落とされたのだ……恐らく、書齋の中へ追ひ落とされたのだ……君に電話が掛るか？　君が電話口に出るか知ら……

『それが、その時のシメオンです。君に通知さへ出來たら死んでも好い。彼は交換局を呼び出した。君が出て來た。君の聲だ。同時に、エッサアレが戸口の所へ猛然と現れた。君のお父さんは焦つた、叫んだ……『パトリスかい？　鍵は屆いたかい？　手紙は？　見ない？……それは大變だ？　お前は何も知らないのだ……』……で君は彼方の電話口の所で、嗄枯れた叫び聲や、何だか譯の解らない騒々しい音、それから何だか格闘でもしてゐるやうな聲を聽いたでせう。肩を送話器に押し付けて、切れ切れになつて譯の解らないやうな聲で、『パトリス、紫水晶の頸飾……パトリス、俺は心からさうしたいと思つて居るんだが……パトリス、コラリイ』それから大きな變り聲……その叫び聲はダン〳〵弱くなつて來た。……靜かになつて了つた、さうして萬事休したんです。君のお父さんは死んだんです、殺されたんです。エッサアレ・ベイが、昔、小屋でやりそこなつた復讐を、今度こそ仇の上に遂行し得たのです』

ドン・ルイは再び言葉を切つた。情に迫る物語りで、昔の悲劇が繪卷物のやうにパトリスの心中に展開された

『ああ、氣の毒なお父さん……』とパトリスは悲しさうに叫んだ。

『さうです、誠にお氣の毒な事をしました。君の日記にある通り、朝の七時十九分です、それから暫らく經つてから、君はどんな事が起つたのか知り度くなつて何分かの後電話を掛けたでせう、その時に出たのは、君のお父さんの死骸を足の下に踏みつけて居たエッサアレだつたのですよ』

『おゝ！　惡黨め。あんな殘酷な事をして死體の見別けを付かなくしたんだな。……どうしても分らないやうにしたあの仕業……』

『それで、エッサアレは死骸に細工して、たゞ顔をくだいて自分の姿と同じやうにして了つたんです。大尉――總ての不思議な事は此所から出發するんです。――シメオン・デイオドキスが死んでエッサアレ・ベイに化り、エッサアレ・ベイがシメオン・デイオドキスに變裝して、シメオン・デイオドギスの役劇を演じた譯ですね』

『さうですか……私にも……私にもそれでよく解りました。』とパトリスは呟くやうに言つた。

『此の二人の間の關係に就いては』とドン・ルイは續けて言つた。『エッサアレは此の老シメオンが自分の昔の戀仇だと知つてたでせうか？　コラリイさんのお母さんの戀人で、殆んど棺の中へ片足入れて居たのを助かつたあの戀仇と同じ男であると、エッサアレは氣が付いて居たかどうか、これが君のお父さんだと知つて居たか、どうか私にも明瞭には解りません。然し是れはどうしても明らかにし得られない事です、そして別に明らかにする必要もないでせう。思ふに、此の殺人は咄嗟の間に起つたものではないらしい。エッサアレが、シメオンと身體の恰好がよく似て居るのを見て、若し事態が彼

の姿を消して了ふ事が必要になつた場合には、シメオンと取つて變つてやらうとかねてから狙つて居たに相違ないと思ひます。シメオンは假髪を覆つて居て、鬚がなかつた。それに反してエッサアレは頭が禿げて鬚が澤山生えて居た。それで仕事は容易く出來たんですよ。彼は自分の顏を剃つて、シメオンの顏をストーブの薪臺で撲り、血まみれの相手の顏に自分の鬚を膏藥で張り付けておいたんです。それから死體に自分の衣類を着せ、相手のを剝いで自分の身に付け、假髪を覆り、眼鏡を掛け、頸卷をしたんです。斯うして巧に變裝して了つたんです』

パトリスは暫く考へ込んで居た。それからドン・ルイの此の言葉に反對して言つた。

『その事件が起つたのは七時十九分過ぎです。然し十二時二十三分過ぎにも何か起つて居るんですよ』

『いや、何にも起つて居ませんよ』

『然し……あの時計は十二時二十三分過ぎに止まつて居たぢやありませんか？』

『でも、何事も起つては居ないんですよ。たゞ、彼奴が人から嗅ぎ付けられるのを避けて、わざと時計をあゝしたと云ふ丈の事ですよ。殊に此の新らしいシメオンにふりかゝる嫌疑を避けたゞけの事ですよ』

『嫌疑つて何のです？』

『何のですかつて？　勿論、エッサアレ・ベイを殺した事の嫌疑ですよ？　朝死骸が發見された時誰が殺人を犯した……と云ふ事になりませう？　すぐに嫌疑は新シメオンの上に掛つて來るぢやありませんか？　彼は訊問された上逮捕と定まるに相違ない。さうなると、エッサアレはシメオンの面を被つて居る事が解つて了ひます。いや、彼の欲して居るのは自由なんです。彼の思ふ儘に振舞ひ度いのです。斯ういふ目的を達する爲めに、祟の死體を朝の裡に隱しておいて書齋の中へは誰も入れさせなかつたんです。エッサアレ・ベイが朝の裡は生きて居たと思はせる爲めに三度程、妻君の所へ行つたんです。

『それから妻君が出て行く時に、あの男は自分の地聲を出して、シメオンに命令したんですね、まあ云へば、自分自身に云ひ付けて、妻君をシャン・ゼリゼーの病院まで送つて行く

やうに云つた。斯んな風でエッサアレ夫人が出て行く時には、夫は生きて居るものだと思つて居るし、又今送つて來て居るのはほんとのシメオンだと思ひ込んで居たわけです。實際はシメオンは書齋の中で死んで居て、今送つて來て居るのは彼女の夫だつたんです。

『それから何んな事が起つたつて？　そりや惡黨の思ふ壺に陷まつただけですよ。午後一時頃、コアッキイ大佐の密告に由つて、警官が來た時には、もう死體になつて居たんです。誰の死體だか此れに就いては何等の疑惑も起さなかつたんです。女中達は主人の死骸だと云ふし、エッサアレ夫人も一昨夜、良人の責め苛まれたストーブの前で死んで居るのは疑ふ方なき彼女の夫だと思つた。エッサアレの化けた老シメオンも彼女のいふ事を裏書きしたんです。君だつて今迄騙されて居たんです。まあ斯んな具合であの男の企らみは成功したんです』

パトリスは頷いた。

『あゝ。だから總ての事が斯んな風になつたんですな。成る程ねえ。』

『斯んな風に企らんだものだから、誰れだつて氣が付かない譯です。その上に又、有力な證據が出て來たでせう、といふのは、エッサアレの手蹟で書いた手紙です。彼の妻に宛てた物で、四月十四日の十二時の日附けで、遁走する旨が書いてありましたね。それに、もつと好かつた事には、眞相を摑む手掛りと成る可き物が、却つて隱蔽する道具に成つたので、運びは益々手際よく行つた譯ですね。例へば君のお父さんの胴衣の内ポケットには、いつも小さな寫眞帳が入つて居たんです。エッサアレもそれには氣が付かなかつた。それが一つ手抜かりです。だけれど、警官等は寫眞帳を發見した時に、すぐ次のやうな馬鹿げた推察をして了つた。エッサアレ・ベイは夫人とベルヴル大尉の寫眞を澤山入れた寫眞帳を肌身に付けて居るとね！

『それと同じ筋道で、死人の手に、つまり君のお父さんの手に君たちの最近の寫眞を入れた紫水晶の頸飾を見た時も、それから、金三角の事で何かを書いてある皺苦茶な紙を握つて居るのを見た時も、彼等はエッサアレが何所かで盜んだものので、それを握つたまゝ死んだんだとして了つたんです。だからもう殺されたのはエッサアレ・ベイに違ひない、目前の

死體は彼だと定めて了つて、此の問題に就いて、警官等の念頭に置く物は他に何物も無くなつたんです。斯うして巧く萬人を欺いて新シメオンが舞臺に現はれて來たのです。エサツアレ・ベイが死んで、シメオンが生きて居る事になつたんです。大成功だ！』

ドン・ルイは心地好さゝうに笑つた。此の惡黨の創造に成る冒險談を、藝術家の心で味つたのである。

『それからですよ、もう誰にも解らない假面を覆つて、其處此處で仕事をし始めたんです』とドン・ルイは更に續けて言つた。『彼は君とコラリイさんとの會話を聞いたその日、君がユラリイさんの身體の上へ身を曲めて居るるを見せ付けられたものだから、怒りに燃え立つてあのピストルを擊つたんですよ。然し失敗したと氣が付くと、庭の戸の側で隨分込み入つた喜劇をやり出したんです、鍵を壁へ投げ付けて、人殺し……人殺し……と叫びながら、そしてさもピストルを擊つた男に咽喉を締められたと云ふ風に、半死の狀態を裝つて、地の上へ倒れて居たものです。此の喜劇と同時に氣が狂つたと云ふ事にして了つたんです。』

『どんな目的で氣狂ひの眞似なんかしたんでせう？』

『何んな目的……それや解つて居るぢやありませんか、色々な事を人から聞かれたり、又疑はれたりさせない爲めですよ。氣狂ひと思はれてからと云ふものは、全く自分の行動に氣を付けて見る人はなくなつて了つた、それに彼が如何に巧く言葉の調子を變へて見た所で、口を切る瞬間に、エッサアレ夫人に夫の聲だと疑はれる怖れがあつた。其の時からズツト氣狂ひになり切つて了つたんです。

『それでもう彼の行爲には何の責任もありません。行き度い所へは勝手に行くと云ふ風で、氣狂ひ其の儘だつたんだね。君だつて全くさう信じ切つて居たからこそ、君を以前の一味の所へ引張つて行つて其奴等を拘引させたのも、實は彼奴が冷靜な頭から割り出した打算からだとは、少しも氣が付かなかつたでせう。それほど氣狂にされちまつて居たんです。

『彼は氣狂ひで、而も、少しも害にならない氣狂だつたから、誰も彼が不幸の種を探し出して、一肌脫がうなんて夢にも思はなかつたんです。だから彼奴は、彼奴の最後の敵と戰へば好いと云ふ事になつたんです。それは勿論、君とコラリ

イさんの事です。そして之れは彼奴に取つては至極容易い事なんです。彼奴は君のお父さんの日記を見た。兎に角、君が記けて居る日記も知る事になつた。それから例の墓の話が解つたんですよ。それで、四月十四日には、コラリイさんと君とが、連れ立つて墓の所へ行くと云ふ事を知つたんです。彼の計畫の用意が出來てから、君達に行かせるやうに仕向けたんです。そこで彼奴は、息子と娘、即ち今日のパトリスとコラリイとに對して、彼が曾て君のお父さんと、コラリイさんのお母さんにした通りを行はうとしたのです。その時、ヤ・ボンが私を考へ出さなかつたら、或は彼奴は成功して居たかも知れません。然し有り難い事には、私と云ふ新らしい彼奴の敵が、その中へ飛び込んで行く事になつたんですね。……然しもう之れは言ふ必要はない。私の知つて居る事は君も知つて居る所だから。それで、此の人間離れのした惡黨が、僅か二十四時間の裡に、一味のグレゴアール、即ち妾のモグラネム夫人を絞め殺し、コラリイさんを砂の中へ生埋めにし、ヤ・ボンを殺し、私を小屋の内へ閉ぢ込み、君をお父さんの掘つた墓の中へ叩き込み、それから門番のヴシュロオを形付けて了つた見事さは、君も私と同じく御承知だ。それでだ、ベルヴル大尉、臨終に臨んで居る癖に、まだ君のお父さんのやうな顏をしようとして居る彼奴の自殺を、私が止めなければならなかつたでせうか……』

『なさつた事に間違ひはありません』とパトリスは言つた。

『貴方は始から終ひまで正義で押し通したんですね。もう私は今詳細に亘つて何も彼もよく解りました。然しも一つ知り度い事があるんです。例の金三角なんです、貴方はどうして見付け出したんです？　どうして砂山へ來て、コラリイを怖ろしい死から救ひ出すやうになつたんです？』

『それですか、それは何んでも無い事だつたんですよ。私に何處からとなしに光明が、差し込んで來たんですね。然し、まあ、何處かへ場所を變へませう。デマリオン氏と部下の奴等が、一寸面倒になつて來ましたから』とドン・ルイは答へた。

警官が、ベルトウの渡止場の兩方の入口へ配置された。デマリオン氏がそれを指揮して居た。ドン・ルイの事を部下の者等に話して、逮捕しようとして居るのに違ひない。

『運送船の方へ行きませう』とドン・ルイは云つた。『僕は彼處に、大切な書類を忘れて來ましたから』

パトリスは彼に隨いて行つた。グレゴアールの死骸を置いた船室の、向ひ側の部屋へ、二人は昇降口の階段を通つて、入つて行つた。机も、椅子もおいてある。

『大尉、此の手紙を渡しておく……』とドン・ルイは机の引出しから、手紙を取り出し乍ら云つた『で、もう我々は愚圖愚圖しては居られない。私には、君の好奇心を滿足さしてあげる時間はもうないんです。私の友達はもう近付いて來て居るんです。さう〳〵我々は金三角の事を云つて居たんですねえ……』

彼は、外の方に氣を配つて居た。彼の話で、今すぐに眞相がパトリスにも解るのである。彼は再び言葉を續けて、

『金三角……之れは、私が努力した爲めに解つたんぢや無くつて、偶然の機會から知れて來たんですよ。思ひも寄らなかつた出來事からです。暗闇を手探りして居たのが、急に、その目的物が眼に着いたと云ふべきです。……今朝、君を墓の所へ連れて行つて、石の下へ君を生埋めにしてから、エッサアレは此所へ歸つて來たんです。彼奴は、私を書齋の中へ閉め込んだものだと信じ切つて居たものだから、瓦斯の栓を捩ぢた、そしてベルトウの波止場の上手の、荷揚げ場へやつて來たんです。此所で、彼は暫く躊躇して居ました。此れを見て、私は貴重な端緒を得たんです。彼奴の、その時の考へはコラリイさんを助け出さうと、云ふ所にあつたのに違ひない。然し人通りが激しかつた。だから、彼は其儘行つて了つたんです。何處へ行つたか、すぐに私は感付いたから、そこを去つて君を助けに行つたんです。そして、エッサアレの家に居る君の友人達に預けて、介抱を頼んでおいたんです。

『それから、私は又此所へ歸つて來ました。事件の行き掛り上、どうしても歸つて來なけりやならなかつたんです。金貨は、どう考へて見ても、拔け穴の中には無ささうだ、それかと云つて、ベル・エレヌ號も亦、金貨を運んで居ないとすると、庭の外でもあり、拔け穴の外でもある。だから此所の近くに是非有る筈だ。私は我々が今立つて居る此の船を捜査して見た。金貨を探すといふよりは、何か思ひ掛けない手掛りはないかと、實を云ふと、グレゴアールの手の四百萬法を捜す

つもりでね。それでね、私は物を探し損なつた時には、いつも、エドガア・アラン・ポーの小說の『偷まれた手紙』の筋を思ひ出すのですよ。君は知つて居ますか？ 盜まれた外交文書が、或る部屋へ隱されて居る事だけ分つて居るんです。警官が部屋の隅と云ふ隅は殘らず探し、お終ひには床の下まで外して見たんですが、見當らなかつたんです。然しデュパンと言ふ人は來るとすぐ、壁の引手の所からブラ下つて居る狀差しの所へ行つた。その中に汚れた皺苦茶になつて居る手紙が一本あつたんです。此れが探して居た外交文書だつたんです。

『それで、私も衝動的に此の方法に由りました。すぐ見付かるから、到底隱し場所にはならない所、だから誰れも目を付けないやうな場所を探したんですね。それで、本棚の下に立て、あつた人名辭書を取り出して、頁を開いて見た。そしたら、グレゴアールの四百萬法が其處にあつた。これで、知り度いと思つて居る事が總て分つたのですよ』

『どんな事が分りました？』

『エッサアレの性格や、習慣、智識の程度、隱し場所を工風する彼の考へ方などが分つたんですよ。我々は餘りの遠方を、餘りに深く考へすぎて居た。餘りに事を難かしく、考へ過ぎて居たのです。もつと外面や表面を見れば好かつたんです。それにもう二つのちよつとした端緒から思ひ付いて私は調査したんです。私はヤ・ポンが何處からか持つて來た繩梯子に、砂が着いて居たのを覺えて居ました。最後にヤ・ポンが白墨で、舗石道の上へ、三角形を書いた事を思ひ出しました。然し三角形の二邊を書いただけで、他の一邊は引かなかつたんです、その二邊と塀のきはとで、丁度三角形になるやうになつて居るんです。これは何故か？ 何故、三番目の線を白墨で書かなかつたんでせう。三番目の線のないのは、つまり塀の足もとに隱し場所があると言ふ謎だつたのでせうか？ そこで、私は急に煙草に火を點けて、運送船の甲板の上へ坐つて、廻りを見廻はしながら、獨り言を言つたものです「リュパンは、もう、五分も要らないぞ」我ながら制し切れぬ力だつたのですね。卷煙草を四分の三も喫はぬうちに私は分つた』

『見付けましたか？』

『見付けましたとも。頭の中で整理した諸要素から、火花が出たのか？　私には分りません。突然氷解したのです。化學實驗と同じやうな、複雜な心理作用です。その心理作用が働きを及ぼす要素中の、神秘的な反應と結合とによつて、たちどころに正しい觀念が形成されました。その上に、私には非常に特殊な直觀主義の異常昂奮がある。それが私を動かして、あのコラリイを埋めた隱し場所を發見させて呉れた譯です。

『こちらは王手を掛けた、一つぐらついたら、一つためらつたら、負けだ。十米の圏内に、一人の女が居るのだ。知らねばならぬ瀬戸際だ。私は知つた。火花が迸る。結合が濟んだ。私は一目散に砂山に向つたのです。

『微かな足跡が直ぐ目に付いた。上の方には、踏みならした痕跡がはつきり分つた。私は掘つたのです。初めて金貨の袋に觸れた時、私は感動で張り裂けるやうでした。然し、徒らに感動しては時間がたつ。袋を幾つか掘返して見ると、その袋がコラリイさんの上に蓋をして、つまり、かぶさつて來る砂が呼吸や眼を塞ぐのを防いで居たのです。これ以上は詳しく言ふ必要はないでせう。その時荷揚場には人影もなかつた。私はコラリイさんを引出すと、自動車を傳つて第一に、コラリイさんの家へ、お連れしたんです。それから、全力をエッサアレやヴシュロオの方へ向けたんです！　敵の計畫が解つたものですから、デエラデック博士と色々相談した……。最後に君とコラリイさんとを、モンモランシイの私立病院へ連れて來るやうに、命令して置いたんです。だから、大尉、貴方も彼方にいらつしつた譯ですよ！　總ては三時間の裡に出來上つたんです。博士の自動車で、私が病院まで歸つて來た時、丁度ベッサアレが、自分の怪我を見て貰ひに來たのです。それで、彼奴を擒にした譯ですよ』

ドン・ルイは話し終つた。

もう、二人の間には、必要な話はなかつた。一人の男は、持つて居る總ての力を絞り出して、對手に盡したのだつた。對手の男は、その盡力に對しては、如何なる感謝の言葉でも、猶足りないと思つた。さうして、彼の行爲に報いる機會は、到底來ない事を知つて居た。ドン・ルイはとても人間業で出來ないといふ物を持たぬ人間であつた。我々が、日常の

仕事を處理するのと同じ態度で、斯る神智を示し、斯る奇蹟を完成して行くやうな男には、何にもお役に立ちようがない。パトリスは、無言の儘、相手の手を固く握り締めた。

ドン・ルイは、此の無言の感激を、喜んで受けた。そして

『若し君の前で、アルセエヌ・リュパンの話が出たら、君は、彼等に、此の事をよく話して呉れますか……ええ、それだけの價値はありますよ』と彼は笑ひながら言つた。

『何處へ行つても僕の評判か、好くなつて行くなんて、實に、不思議ですよ。悪黨も年寄つてまあ、佛になつたと云ふ譯ですねえ。』

彼は、暫らくの間、耳を聳てて居た。そして

『大尉、もうお別れの時が來ました。小母さんのコラリイさんに、宜敷しく言つて下さい。コラリイさんには、まだ之れと言つてお話もして居ないんです、そして、コラリイさんは、僕を御存じないのです。その方が却つて好いんです。さやうなら、大尉さん。で、もし悪黨の面の皮を剝ぐ必要があつたり、善人が不幸になつたり、謎を解く必要が生じたりした場合には、猶豫なく私に相談を掛けて下さい。手紙を寄越せるやうに、居所は始終お知らせする方法を執りますから。では、もう一度さやうなら』

『では、我々は、もうお別れするんですか……』

『さうです、デマリオン氏が來る氣配がします。迎ひに行つて、何卒、此處まで連れて來て下さいよ。好いでせう？』

パトリスは躊躇した。何故、ドン・ルイが、彼にデマリオン氏の所へ、出迎ひに行けと云ふのか……パトリスの居るのは、もう邪魔になつて來た爲めであらうか？　斯んな考が、パトリスに浮んだので、彼は昇降口を出て行つた。

パトリスには、永久の謎になつたやうな事が起つた。それも、瞬間の、素早い無言裡の、どうしても說明の付けられぬ出來事であつた。永い憂鬱な冒險か、戲曲的な突發事件で、突然幕を閉ぢたとしか思はれない出來事だつた。

パトリスは、吊橋の所で、デマリオン氏と會つた。彼は訊ねた。

『君のお友達は、其處に居られますか？』

『居ります。然し一寸待つて下さい。貴方はあの人を……』

『いや、心配は要りません。何にも、あの方に不利益になる

やうな事は、絶對にありません。』

その答振りが餘りに確定的だつたので、大尉は何にも云ふ事がなかつた。デマリオン氏は、先頭に立つて下りて行つた。パトリスもそのあとに續いた。彼等は梯子を下りて行つた。

『おや、此の船室の戸は開けて置いたのでしたが？』とパトリスは叫んだ。

彼は戸を押した。戸はあいた。然し、ドン・ルイの姿は、もう其所には無かつた。

早速調べて見た。波止場に居つた警官たちも、その時、大通りを見張つて居た警官も、そんな男の影も見なかつたと云ふのだつた。

『此の船をよく調べて見たら、きつと、何處かに、何か仕掛があるのだと思ひますよ』パトリスは云つた。

『では、君のお友達は引窓から泳いでゝも逃げて行つたんでせうか？』とデマリオン氏は、混亂した顏付きで云つた。

『私もさう思ひますよ。でなけりや、潛航艇でゝも行つて了つたのかも知れませんね』と笑ひながらパトリスは云つた。

『セーヌ河に潛航艇？』

『そんな事はないといふんですか？　私の友達の智略と決斷力には限界なんかありませんからね』

デマリオン氏は啞のやうになつて居たが、ふと自分に宛てたドン・ルイの手紙を、机の上で見付け出した。之れは、パトリスと話しして居る間に、彼が殘して置いたものだつた。

『おや、あの男は俺の此處へ來ると云ふ事を知つて居たのか……俺と會はない前から、俺が何か手續でも執るとでも先見したのか知ら……』

手紙の内容は斯うであつた。

デマリオン様

突然お分れする事をお許し下さい。そして貴下が私を追跡して此所にいらつしやる所以に就き私の執る態度をお信じ下さい。お察しの通り、私の身分は合法的の物ではありません、從つて貴下は私に説明を求るめ權利をお持ちです。私はその説明をいつか他日に讓る事と致しました。固くお約束申上げます。もし私が佛蘭西のために採つた方法が

――その方法は決して悪い方法とは考へませんが、戰時中お役に立つ事がありますれば、私は、その功績に對して我が國全體の人々から感謝を以て迎へられると信じます。何時か再びお目に掛つた節には、誠に、貴下からも感謝して頂きたいと存じます。さうして其の機に、――貴下の心ひそかな御野心を忖度して――警官としての貴下に身をお任せ申し上げませう。私は個人的に、貴下の御昇進に就て貢獻をなし得るのを光榮と存じて居ります。此點に就て私は全力を盡す所存であります。諒焉、云々……。

デマリオン氏は長いこと沈默して居た。やがて彼は云つた。

『不思議な男だ！　あの男が承諾さへして呉れるのなら、私は非常に重大な事を頼みたかつたのだ。私はヴランゲレイ閣下の命で、それを傳へに來たのですよ』

『いや、貴方』とパトリスは云つた。『あの男が實際やつた事は、それ所ぢやない、もつと重大な仕事だつたんですよ』

そして彼は云ひ添へた。

『眞に不思議な男だ！　二度と見られぬ不思議な男です。貴方の想像よりも、ずつと不思議で、更らにそれ以上力強い男です。もし聯合國に、あんな人間が三四人づつも居つたら、戰爭なんか半歲たらずで濟んで居たでせうね』

と、デマリオン氏は呟くやうに云つた。

『その通りですとも……だが、斯う言ふ種類の男は大概不羈獨立の氣魄に富んで居ますから、自分の頭にたよるばかりで、どんな權力にだつて左右されるものではありません。數年前の事ですが或る有名な冒險家が、自分の入つて居る牢屋へカイゼルを呼び付けて放免させて貰ひ……そして其の後カプリの斷崖から投身して死にましたが、その男によく似て居るではありませんか』

『誰です、それは？』

『貴方はよく御存じですよ……リユパン。……アルセエヌ・リユパンです』

昭和四年五月一日印刷
昭和四年五月三日發行

アルセエヌ・リユパン
定價壹圓五拾錢

譯者　佐佐木茂索

發行者　山本三生
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番 一一一一番 二二二二番 三三三三番 四四四四番

（兩角製本）

株式會社秀英舍印刷

田中貢太郎著

奇談全集　歴史篇

四六判八ポイント二段組五八〇頁
定價壹圓五拾錢
送料貳拾貳錢

○青の洞門物語○唐人殺し○袈裟懸の辻斬○岡崎巷説○紅鹿子の笠紐○有馬温泉物語○總穆寺の復讐○瀧山に砦を構へて○禪讓○伯夷叔齊○松風村雨物語○橘次兄弟○朝比奈が曾我を訪ふ日○楠正行の中風○女塚の主○安土への使者○祖先のまぼろし○長曾我部盛親○蟬の痛み○花見物語○酒合戦物語○芭蕉菴の春○捜蛙負けるな一茶ここに在り○仁義行○吉田御殿原話○月前の怪異○騙術國○七人の夫人○文錢牌樓○虞姫○女の市○支那歴朝帝位簒奪史○妓生春香物語○虎妖奇談○人參の精○心の奉加○京の土妓○遊女殺し○黄楊の水櫛○雀の宮物語○ある神主の話○姉妹の復讐○木彫の像についての話○俳諧修業○海賊○偸盗篇○雞物語○鼓の音○旅僧○猿の話○目出度い話○龍を生捕った話○坂本龍馬の一面○四國巡禮記○兄弟の死

＊　＊　＊　＊

田中貢太郎著

奇談全集　現代篇

四六判八ポイント二段組五百餘頁
定價壹圓五拾錢
送料貳拾貳錢

○脂取り一揆○松木騒動○闇闇秘記○模範教師○村の盗人○針打ち○近江の卷○遺言狀○名畫の野猪○丸山教祖物語○仙術修業○畸人列傳○神仙河野久○木食僧と語る○瘤○蛇田の話○鷲○白つぼい洋服○鬼熊一代記○殺人鬼横行○枇杷葉湯賣○破獄囚の話○播磨屋橋遺聞○一犠牲者の話○幕末の暴力團○水金町綺談○木ノ江港插話

FRANC

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black